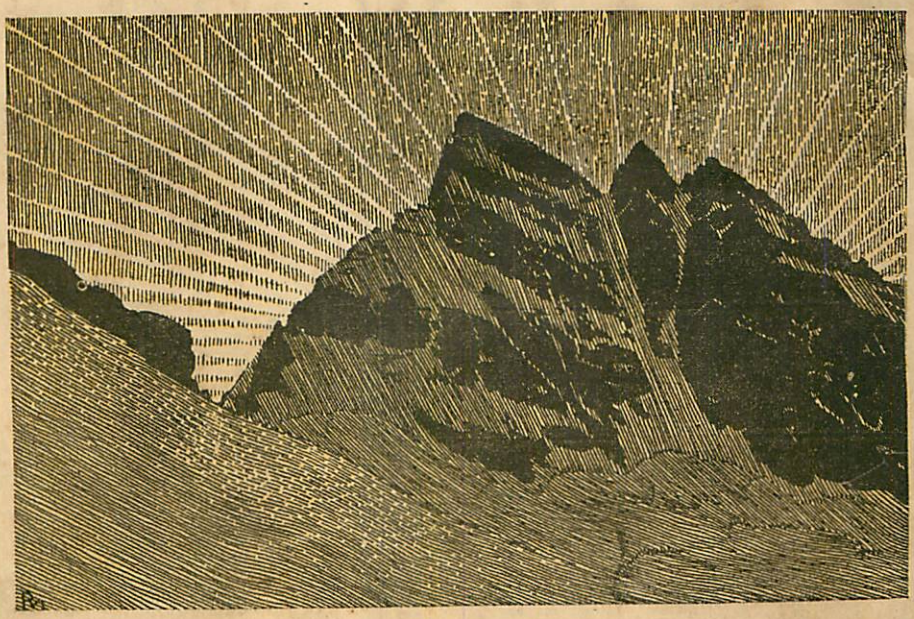
山とスキー



記念號

第五十號

札幌 山とスキーの會 發行

第五十號記念號目次

記事

■五月の黑岳小屋を中心として　山口健兒〔一〕
■如何にして安全に登るべき乎　ジョージ・デ井・アブラハム　和辻廣樹譯〔一四〕
■エミール・ジャヴエルに（詩）　大島亮吉〔二六〕
■山岳及びスキーの身體に及ぼす影響と　それ等に依つて起る負傷に就ての研究　本田治吉〔二八〕
■五月の鳳凰山地藏岳　額田敏〔三六〕
■スキーの思ひ出　大野精七〔四二〕
■始めてスキーを練習した時　志賀亮〔四七〕
■「山とスキー」五週年記念號發刊に際して　感想　加納一郎〔五〇〕

感想　中野誠一〔二五〕
第二年刊行當時の事ども　長谷川敦〔五四〕
第四年目の事ども　君一生〔五六〕
現在及び將來の事ども　廣田戸七郎〔五九〕
■十三シーズンを送りて　廣田戸七郎〔六一〕
■先シーズンの雪　GOK生〔七〇〕
■大正十四年度各學校山岳部夏期計畫
■彙報抄錄
■會則
■會員名簿

寫眞版

■比布岳より永山岳への雪稜　山縣浩
■地藏岳より南アルプスを望む　額田敏
■黑岳登山小屋附近　山縣浩

比布岳ヨリ永山岳ヘノ雪稜

山縣　浩

五月の黑岳小屋を中心として

山口健兒

餘儀ない用事のために三月の大雪山彙行にとり殘されて内心殘念でたまらなかつたとき、陽に燒けて眞黑な顏をした山の仲間からまだ山の小屋に食料なんかが大分殘つてゐるから五月に出かけたらどうだ、もとが取れるだらうと云はれ早速文句なしに準備にかゝつた。

雀躍して集つた連中は三月以外の顏振で僕以外に六名出來た。即ち安積、西川、山縣、野中、井田、高橋である。

解り切つた準備に日を逐はれる。雪の多いのは觀念しなくてはならない。自然寒さもある程度までは酷しいと思つたが防寒具は大體去年の五月の石狩岳へ行つたときのことを聞いて來て參考にした。

我々の部屋は日がせまるにつれ活氣づき出して來る。山靴に豚脂がコテ〳〵塗られる。ゾムメルシーの金具は直される覺つかない手つきで、破れズボンを修繕する者も出て來る。いつでも我々が山へは入る前に味ふ快い空想が輕い興奮と共に身體中を馳けまはる。

出發の夜には靜かな冷かな夜氣の中に一應は頑とした何處へ出しても恥かしさうにもない山男面が並ぶ。

リュックは皆相當に重い。あまり上品でない手には砂で磨きたてのピッケルがギラリと光る。天晴れな姿である。

その姿は靜まり返つた夜の町を各々思ひ〳〵勝手な歌を歌ひながら停車場へ行く。靴の鋲は石にあたつて火花が散る。

かうして我々は出發した。

十三日の午前五時頃に旭川着、汽車を乘り換へて上川着が八時廿分、美しい天氣である。淡い雲すら目をさへぎらない暖かい日差は快よく肌を汗ばませる。馬車か馬を探したが見あたらないので層雲別まで歩くことにきめる。

皆盛にこぼす。いくらリュックが重くても夕方までにはつくだらうと柔い土の上を如何にも新開地らしい四方を見まはしながら一歩を踏みだす。

ルベシベ川を渡つて眞直に石狩川へ出る。そこから川に沿ふて上りだか下りだか解らない樣な平坦な道を重いリュックを苦にしながらゆく。層雲別の鹽谷温泉迄は上川より六里である。途中盛に休む、どうせ夕方までに着けばよいのだ。日が高くなるにつれ暑くなる。清々しい疎林の新綠、路傍にはエゾエンゴサクの紫の花が續く。いつの間にか正面にニセイカウシュベ山が上部を白く染め長い裾を曳いて現れ出した。皆盛に休む。

層雲別の小學校の前についたときは既に一時半頃だつた。菊谷と云ふ人に人夫の事を賴まうと思つたら留守だつた。そしてそこで如何にも田舍らしいポテトの蒸したのを御馳走になる。量の多いのに皆もてあます。

そこから大雪の連峯が黑く木の繁つた山の後に顏を出して居た青く澄んだ空を後にした眞白な圖谷や山頂(ザツフエル)の美しさに我を忘れて見とれる。何と云ふ美しい姿だらう。それは靜けさの形相である。恍惚とした眼に云ひ知れぬ緊張と喜悅の露が宿る。「あれをやるんだなあ」と云ふ意識がはつきりして來る。

この邊は濶けた段丘の續きである。緩やかな凸凹を持つた開墾地の中に淋しく燒(ヤキ)切株が並ぶ。平和な農夫は一家を連れてその中に働いてゐる。甘い土の香が漂ふ。

そこを通りすぎると谷は狹くなる。兩側は幕の樣な峭壁が續く。川の兩側には快い疎林が陽に輝く。丁度梓川の溪谷を思出させる樣に白樺の繁つた洲が點綴したり、流れの中に白樺が二本或は三本づゝ互に助け合つてゐる樣に淋しく立つてゐる。水の流れはその間を縫つてさも氣持よさゝうに躍り狂ひながら際涯なき行末を歌つてゐる。

一歩々々と濶けて行くにつれて今迄幅廣い河床の砂礫の中を流れてゐた此の川の景趣は次第に狹められて谷は深く、その兩側は高く水の瀨は次第に激しく流れる。

對岸の斷崖が急に開けて一溪が本流に走り込む。その白水川の合流へは四時半頃着いた。

まだ平らな坂道は奥へ奥へと續く。谷は深山の相を益々加へる。溪にもう淡い影がうつる頃飯田温泉につく、急傾斜の

林を後にしたまだ木の香も新しい家である。

加藤温泉はすぐ近所である。重いリュックとスキーで皆相當に顎を出した。鹽谷温泉まで此より約十町である。

川を越して對岸にかけられた釣橋を渡つてから間もなく鹽谷温泉につくまだ新しい家である。大きな風呂場もある。宿の前の砂の上に腰を下して、泣く樣に叫ぶ樣に流れる水の音に聞きとれる。宿屋側には立派な石崖が出きてゐる。流れの中央に巨岩が横はりあぶない丸木橋がかけてある。

玄關で菊谷に逢つたので人夫のことを頼んだ。座敷へ上り丹前に着かへて早速湯に飛び込む。大きな湯槽に湯が溢れてゐる。唯感じの悪いのは妙なコンクリートで出來てゐることだけだ。

ボーと夢心地になつて山の湯の靜けさを味ふ。湯槽から徐ろに舞ひ上る柔かい湯氣、快よい湯の肌ざわり、いつもながらなつかしい氣分だ。天井の窓から夕闇が忍び込む。

一通り夕飯が濟むと皆盛にねむたがる。明日の準備が濟んで落ついた頃晝の疲れで正體なく寢入つてしまふ。夜空は無情にも曇つてゐた。

▲

窓の明るいのに眼を覺す。狼狽て丶飛び起きる。まづ第一に誰かゞ時計を見違へて皆をまごつかせる。

菊谷他二人の人夫にシュラーフザック類、毛皮の上衣、ズボンの類、その他重さうなものを全部背負はせたので皆のリュックは前日に比べて珍しく輕い。

早朝より幾分雨模樣でまづ我々の眉をひそめさせる。朝飯を食つて濕つた空氣の中を出發したのが六時半頃だつた。出發に際し我々を最も喜ばせたのは人夫の持つて行くと云ふ二挺の鐵砲だつた。

急傾斜面にジックサックに切つた夏の道に從つて登る。殘雪が途中より大分多くなり盛に足を雪の中へ突き込む。七時十分一ノ平、周圍には雪が殆んど覆ふてゐる。黑岳より鹽谷温泉に走る尾根即ち展望臺に出たのは七時四十分だつた。これから先は今迄とは違ひダラ〳〵登りである。雪は前より甚だしく足を突きこませるので初めてスキーを附けた。それからはスキーを附けたり、はづしたり大體夏道の通りに尾根を登る。途中急傾斜の登りに大分苦しむ所を過ぎると再び平坦な登りとなる。美しい白樺の林や、タンネンの木立が續く四邊は一面の殘雪で土の露出は見えない。

人夫は盛に鐵砲を振まわして山鳥（エゾライチョウ）を遂ひかけるが見つからぬらしい。九時半廿町目の近所で食事を取る。

空模樣は今朝出發の時とは變り透き通る樣な碧瑠璃の空に春の陽が美事に輝く。眼鏡なしでは眼が雪の反射で痛くなる位だつた。林の中を面白さうに滑りまわつて遊ぶ。

廿町目を越えると木立が疎になる。柔かい丸味を持つた比較的急な斜面が目の前に高く擴がる。その上に黑岳の屹立した黑い岩峯が威壓する樣に見下す。我々は大きなヂツクサツクでそれを目あてに登る。

人夫達は齒の短いカンヂキで眞直ぐに登つて行く。その途中で休んだ所の斜面の快さ、感じのよいザラメ雪。幾條もの曲線が畫かれる。それに交錯して直線も。

急な雪面が續く。それを登る黑い影は遲い。

進路をズツと左の方へとつて登り黑岳の岩峯へ續くお花畑附近の急な斜面はスキーを脱いでクランポンと取換へ心を緊張に震はせながら横登りに登る。

人夫は盛に兎を遂ひまわすが一匹も擊てなかつた。岩峯の側部に密生した偃松と笹の露出には美して樹氷が咲き岩の間には氷柱が立つてゐた。

その露出部に沿ふて頂上へ出たのは午後〇時四十分であつた。空は美しく晴れてゐたが谷から吹きつける風は汗ばんだ肌に粟を波打たせる。

岩蔭に身をひそめて目指すものを得た輕い興奮に暫くは三角標を靜かに見守る。やがて皆の夫々得意のパイプが細いもつれ合つた煙を漂はせる。

眼の前には雪に彩られた岩峻の谷に奔つてゐるのを隔てゝ凌雲岳（二・一三一）北鎭岳（二・二四六）の圓頂が覗いてゐる。烏帽子岳の岩峯も雪をまとふて立つてゐる。

一馬力出して黑岳を小屋の方へ下りる。その下りは風衝りが激しいと見えて雪は凹地に斑點となりて殘つてゐるばかりで他は彈力のある「コケモ、」の密生か、風化せる岩屑、又は「いわごけ」で眞黑な岩塊のみである。

小屋はそこを下り終つた所に一面の積雪に目標の赤旗付の棒と北に向いてゐる屋根の脊が現れてゐるばかりで完全にま

だ雪の下に埋つてゐた。小屋着一時十分。
早速天窓を堀つて中に這入り込む。淡いラテルネの先に浮び出た小屋の内部は設計の不備の爲か床は一面に五六分より一寸位に厚い氷がはつて居り、天井からは無數の氷柱が或は長く或は短く下垂してゐた。水滴が盛に落ちる。
やがて入口が堀り出された。雪のトンネルを通して見た内部は前にも增して荒寥たるものであつた。この氷の上で寢られるか大いに心配になつて來た。
早速ストーヴに火を焚きつけた。皆は附近の露出部の偃松の枯枝を探つて來て燃料にした。尙寢るためには偃松の小枝をストーヴの傍につみ上げた。飯も食つた。
今日中に是非菊谷が歸ると云ふ。夕景谷より吹き上つて來た霧に隱れた黑岳の方へ一つの黑影が登つて行く。その影は薄れゆき消えて行つた。何となく淋しい氣分が偃松切る手を休ませて、行く一人の男を見送らせた。
彼はウ井スキーに元氣づけられて下の村まで走り下るのである。時に五時頃だつた。霧は深くなつて行く。
その夜は赤々と燃えたストーヴを圍んでとりとめのない話に花を咲かせる。外は幽寂な闇の展開である。また〻く星の微笑がしんみりとこぼれる。凍つた雪面は薄明るくぼかされて夢の樣に凉氣の底に沈む。つぶやく樣に囁く樣に山靈の呼吸が耳を慰めてくれる。冷い風が時に輕く雪面を撫で〻來る。
晝の疲れをやさしい鼻聲に委ね、シユラーフザックに休息を求めて寢たのは八時半頃だつた。
あとは唯淋しい焰の光のゆらぎが逃げてゆく煙を追ふばかりで次第に沈默が濃くはびこる。

▲

五月十五日、人夫と誰かの低音の話し聲にまだ寢たらぬ眼を開く、馴鹿の袋から首を出して見ると堀り下げた窓からの光線が強く眼を射る。ストーヴを圍む友の頰には美しい晴天を喜ぶ色が漂ふ。今日は大雪山彙の雄、旭岳（二二一九〇・三）へ登ることにする。
食事は各々例のエゴイズムを發揮する。一先づ用意が出來て出發したのは八時だつた。
小屋の前からすぐゾムメルシーを附ける。輕いリユックが扁蟲（だに）の樣に背についてゐる。雪は硬く凍つてスキーの稜（エッヂ）さへ

立ち難い。碧空を後にして雪の頂が優しくさし招く。

凌雲岳と北海岳の間の緩やかな臺地を北鎭岳のサッテルに向つて登る。所々に夏道の指導標が立つてゐた。

途中からは爆裂火口の上部に沿ふて登る。火口底及火口壁は眞白な雪で丁度乳鉢を上から見た樣である。東北に寄つて北海岳の尾根のはづれで急角度に火口壁が切れて火口瀨を形成してゐる。

北鎭岳のサッテルに登りつめると熊ヶ岳と旭岳が首を出す。そこからは火口壁の上部を迂周する。途中よりスキーを脫いで岩礫の露出部を熊ヶ岳と小爆裂口を隔てた尾根まで歩いた。そして其處で晝食をとることにした。

陽はガン〳〵輝つて居たが風が稍强くて相當寒かつた。牛酪臭い熊ヶ岳の山容に恍惚としたり、ズッペを沸したり、ヨードラの講習などで不經濟にも二時間位完全にのびてしまつた。出發したのは十二時だつた。

其處から間もなく旭岳の裾部に向つて痛快な直滑降を飛ばす。この時分から雪が濕氣を帶びて軟かくなり輪をつけてなかつたピッケルは杖の用を爲さなくなつた。

麗しい五月の陽光を浴びて嚴冬の粉雪の樣な山膚を一氣に登りつめて頂上についたのは十二時半だつた。

頂上より見下す松山温泉の方の黑い森、姿見の池の近所の噴氣孔の白煙の後には十勝岳連峯が鮮かに中空に浮び、それに續いて石狩岳連峯の雄大な白い踞齒が霞にほかされて淡く走つてゐる。周圍を見廻せばトムラウシ山、忠別岳より白雲岳、烏帽子、北鎭岳の諸峯が、我々を見つめる。

下りには思ふ存分大きなボーゲンを畫いて五月の雪の愉快さを味ふ。歸路も往路の如くとり熊ヶ岳の前の小爆裂口の上部へ出てから熊ヶ岳の方へ鋭い稜を傳ふ。

歸りは又舊の通り火口壁の上部を週り前に二時間も油を賣つた所へ出た。

それからも舊路を北鎭岳のサッテルに向ひ進んだ。雪は軟かくなりズボ〳〵とスキーがもぐるのに閉口する。

北鎭岳のサッテルよりは頂上目がけてジックザックで一氣に登りつめる。頂上についたのは三時廿五分だつた。

頂上よりは今まで見えなかつた西方の比布岳（二一九一）愛別岳（二一一二）永山岳（二〇四六）の雪峯が手にとる樣に近くに現れた。

小憩の後黑岳の小屋の方へ向つて滑り出す。最後に滑り出してふと見ると黑胡麻の樣な黑點が一つ氷河の樣な北鎭より

の谷の中を矢の樣に奔つて行く。續いても一つ、その後に美事なボーゲンが續く、暫く氣を呑まれて見つめてゐた。黑點は立止つて見上げて待つてゐる。

皆滑り下りてから一緒になり美しいスプールを見つめて今更ながらスキーの快味を語り合ふ。

日中の暖かい光に溶けた雪は黃昏の冷氣に凍つて鏡の樣に光つてゐた。夕陽に投げ出される我々の影と氷面にうつる影との二つは美しい諧調のもつれだ。

眼の前の廣い谷は丁度永河の樣だつた。そして夕陽が北鎭岳の肩に優越を誇るかの樣にかゝつてゐた。見渡す氷つた雪面と靜けさ、陽光は丁度穩やかな海に沈み行く太陽の波間にキラ〳〵と踊り狂ふ樣に氷面に長く大きく千切れ〳〵に照り輝いてゐた。金色の踊り子を載せてゐる雪の斜面は銀色に丁度錫箔の樣な色だつた。

その中に混つて淡い陰影に浮き出す直線と曲線の交錯、美しい世界である。夢見る樣な氣分で宇宙を斷ち破らんとする身を無理に引とめてゐる樣な氣持、山々は親しみ多い慰藉を惜しげなく投げかけて呉れる。

人々がその日の苦しかつた勞作を思ひかへすとき必ずしも苦痛ばかりが現れて來るものではない。愉快な思出となつて我知らず心を微笑ませるものだ。尙それ以上に涙の出る嬉しさも涌く。

やがて美しく薇薔色に輝く四圍の嶺々の夕映えを岩に腰かけて薰らすパイプの紫の煙の陰から眼を輝かして見ることが出來るであらう。

七個の黑影は大きな谷を一散に黑岳の登山小屋の方へ消えてゆく。

▲

十六日、前日にも增して朗らゝかな朝が雪の下に埋つた登山小屋の玻璃窓に訪れた。床の氷は大半溶けてゐた。

懷しい火の光と音が沈み切つた空氣の中を力强く色彩づける。大きな袋は順次に起上る。

飯が出來上り一先づエゴイストの活動が止んで二日前とは似もつかぬ顏が小屋から全部はひ出て並んだのは八時半頃だつた。今日は山彙の西部の比布岳永山岳方面に出掛けることにする。

雪頂は前日の朝の樣に硬い。小屋の前よりスキーを附ける。前日登つた平坦な臺地を北鎭に向つて登り、途中より凌雲

岳との鞍部を目がけて進む。雪の表面は前日の夕暮の樣に凍つてゐるので後滑を盛にやる。

それより北鎭の裾に沿ふて緩く登つて行つた。北鎭より比布岳へ續く尾根へ出るのにあまり角度の急な上りのためにスキーを擔ぎクランポンを用ひ足場を作つて登つた。

これへ出るには我々の針路をとらずに臺地から眞直に北鎭岳の右方の屋根の上部へとりついた方がどんなに得策かわからない。時間も大分節約出來ると思ふ。

その尾根は嶮しいので南に面した雪の膚の上を制動をかけて斜めに比布岳のすぐ下部に出る。比布岳への上りも思つたより樂に濟んで頂についたのは十二時十分だつた。

落ちかゝつた雪庇が目の前に續く。愛別岳（二・一一二）は比布岳のすぐ北に魅力ある山容を聳立さしてゐる。鋭い頂上の雪の上に小さな三角標が見える。東斜面は殆んど全部眞白であるが反對側は黑い岩ばかりだ。比布より愛別に續く尾根は比布の頂上より約百米程下より光つた鋭い山稜が眞直ぐに中天に走つてゐる。その頂上近くは絶壁の樣につきたつてゐる。岩は大分根がゆるんで且脆さうであつた。

愛別岳を右に見ながら細い雪稜を無名の三角標所在の頂上へ出る。比布岳頂上よりこの嶺へ續く雪稜の感じの良さは永久に忘れられないだらう。又この嶺より眺める旭岳の斜面も美しい。

この嶺より永山岳を見ればまだ百米程下方にある。永山岳は尾根を傳はずに比布岳のすぐ下の谷へ滑降し斜めに永山岳の頂上へ出た。頂上は今迄とは違い砂礫と偃松である。その小さな空地に寢轉んでのびてしまつた。見る間にバイフエが出る、寫生帖が出る。時に一時廿分だつた。

此處から見る愛別岳の四面は眞黑な峭壁の開展である。小さな或は大きな殘雪は思ひ〳〵に不規則に暖かい陽に輝つてゐる。落付いた氣分でいつまでも岩と雪と青空の快い調和を見つめて歸ることを暫くは忘れてゐた。

歸路は往路の通りに比布岳へ出てそこから一旦北鎭岳の後の谷まで下りて再び北鎭岳へ登つた。

頂上は四時十分、昨日の樣な痛快な滑降を繰り返したが今日は雪の質の悪いのと疲勞の多いため直滑降は一本もなかつた。氷河の樣な廣い谷の途中から凌雲岳へとりついて急勾配の側面を半分疲れてフラ〳〵になりながらキャンデーの勢で兎に角も岩石のゴロ〳〵した頂上へ着いた。

その途中にて深山の人知らぬ可愛いゝ縞鼠を見つけた。それは我々の吹く口笛につれてあどけなく雪の中を長い尾を振りたてゝ跳び歩いてゐた。追へはスキーの上にでも乘つた。二尺程前でカメラを向けても尾に觸れても逃げやうとはしなかつた。美しい天眞の豊滿さに捕える氣は少しも起らなかつた。そんな鼠ですら苦しみを重ねる山男にとつては優しい慰安である。その對照をむげに失はせて恬然たるは獨り下界の俗人のみだ。

頂上は風衝りが强かつた。堅パンの元氣に黑岳の小屋目がけて急峻なスロープを降り始める。時に五時半

此處からはニセイカウシュペ山が綺麗に見える。丁度大海に白船が浮いてゐる樣に裾の方は薄紫に溶けて白い嶺々ばかり淡く横はつてゐる。

大きなボーゲンを心ゆくまで描きながら寄せて來る空腹に小屋に待つて居る汁粉の香ひばかり思ひ出された。

小屋へ着いたのは六時だつた。夕べの雪山の幽妙な靜けさは一日の勞作(アルバイト)に疲れた身に一種敬虔な響きを聽く樣に感じた夕闇の濃く濃く打寄せて煖をとる焰の赤く闇の中に踊るにつれ友の歌聲の快き律動は心に云ひ知れぬ山への憧憬の戰きを誘ふ。

期待してゐた汁粉が出來上つた。鹽を入れると云ひだすものも出て來れば鹽を入れるとからくなると云ふことを心配して反對する者も出て來た。結局鹽を入れた。

さて皆がどんなに食ふかと思つて怖れをなして見てゐたら鍋の底の三人分位に綺麗に殘つてしまつた。

今汁粉を食つたばかりだと思ふのにすぐ引繼いで飯を食ひだす。豪の者は大きな掬ひ茶碗で頑張り出す。山へわざ〳〵食ひに來た樣だ。

腹の方が滿員になると睫毛が仲よくなりだす。氣がついて見るともう寐てしまつた者もゐた。最後の明日の天氣を祈る心の中が互に聞えて來る樣に思ひながら寐たのは十時も既にすぎてからだつた。

十七日、いつになく目が覺めると緊張でいやに意識が冴えて來る。袋から首を出して見ると誰でも同じ樣だと見えて二三人はもう起きて居る。窓から漏れる薄明りに石油ランプの頼りなささうな光が淋しく梁から雫る。

沈み切つた靜かな小屋の暗は次第に天窓から外へ追ひやられて快よい黎明の涼氣が流れこむ。氣持のよい朝だ。

まづ天氣を氣にする。やはり爽やかな晴れた暖かな陽が又今日も御厄介になりますと云ふ樣に出かかつてゐる。今日も天氣は大丈夫だ。まだ夢中を彷徨してゐる連中を叩き起して仕度にかかる。もう夜が明けたのかと云ふ樣な顏をした者には晴天はやはり嬉しさうだ。

ゴヤ〳〵必ずある出發の前の一騷ぎがすんで小屋の入口から雪のトンネルを偃ひ出て列んだのは八時十分だつた。

小屋の前からすぐスキーをつける。前々日に比べると大分雪が溶けてゐる。北海岳を目がけて雪に覆はれた澤を渡り北海岳の尾根に續く丘陵をダラ〳〵登りに登る。北海の頂上から北に走る尾根にとりついたのは八時五十分、そこより頂上目がけて尾根を眞直ぐに東側を登る。頂上着は九時十五分、頂上は雪がなく砂礫だつた。此處から北鎭比布を背景にした大噴火口の雄大さ、旭岳白雲岳が南方に並ぶ。誰かのリユツクからテルモスが出る。

北海岳からは上りだか下りだか解らない所を一直線に白雲岳へ向ふ。思つたよりは早く基部にとりつき左の方を迂回して赤岳へ續く尾根へ出てそこから白雲岳の圓内に入り右側の壁を迎つて頂上（二二二九）に出る。十時廿分

頂上は凹陷して皿狀をなして火口の跡は明瞭に見分けられる。直徑は五六町である。中央部は平坦にして殘雪の下に尙水を湛えてゐるのが見える。火口壁は西北方が最も高くそこが頂上となつて三角點がある。北側は特に齒牙狀突起を有して安山溶石が累々として雪上に現れ傾斜は可成に急である。すぐ西方に手にとる樣に旭岳が美しい裾を曳いて蟠居してゐる。

頂上の「コケモヽ」の露出の上で忘れられない程美味しい飯盒の飯を食ふ。續いてのびる準備が出來上つてしまふ。バンが出る牛酪（バター）が、乾酪（クリーゼ）が續いて出る。コツホアパラートに火がつき出す。皆の腹に例により多量の石炭が這入る。日は暖かで風はなし天晴れて眺望絕佳の條件が揃つてゐるので申し分なくのびてしまふ。兎に角皆のスキーが動き出したのは十一時四十分だつた。

一旦水口に下り舊路を赤岳に續く尾根へ出てややもすれば切れ勝の殘雪の上を赤岳に向ふ。途中にてリユツク及びスキーを置いて岩石の小片の推積の中を赤岳頂上に向ふ。山頂は殆んど平坦にして東北面は稍急である。

烏帽子岳が手にとる樣に見える。遙かに石狩連峰が幅を利かしてゐる。後方では北海北鎭凌雲が圓頂を並べてゐる。又

幾らか暢氣になつてしまふ。頂上着は十二時廿五分。再びリュックとスキーを置いた所まで引返してスキーをつけて烏帽子岳へ向つて谷へ下る。そこより烏帽子の肩目かけて登り烏帽子の岩峰の基部の風化せる岩石の砂の樣に廣がつてゐる上にリュック、スキーを置いて眞黑な岩の積み上つた頂上へ登る。針靴（ナーゲルシューヤー）の連中は他の連中を盛に威壓する。頂上着は一時五十分、例により暖かい春陽の下の岩の上に長々と寢そべつて動かなくなつてしまふ。

シュマフーベッ川の谷を隔てて北方に黑く黑岳が東方に長い裾を曳いて坐つてゐる。凌雲北鎭の圓顱は悠然と肩を並べてゐる。

又一通り岩蜂の基部で從容としてしまひ出發したのは三時廿五分だつた。烏帽子を下りてからは入り組んだ溶岩の間の雪を縫ひながら眞直ぐに黑岳の小屋に向ふ。

小屋には又昨日の樣に汁粉が待つてゐる筈だ。いい加減の空腹と疲勞とで小屋に無事に歸つたのは三時半だつた。

樂しみにしてゐた汁粉はまだ出來てゐなかつた。その間の間暇に困つて四人計りでショベルを擔いでスキージャンプをヤリに凌雲山の裾の急斜面まで出かける。

沈み行く夕陽を浴びて盛に跳ぶ。雪が濕つて軟かなので思ふ樣なシャンツェが出來なかつたが四・五米は跳んだ。意氣揚々と小屋に引揚げ昨日の通り餓鬼道の亡者を目に見る樣な光景を演ずる。その後は又大飯食ひをやる。實際何とも手がつけられない。

この登山小屋も今夜が最後だと思ふと何となく變な氣持になつた。數日の間我々のおびえ易い夢を靜かに護つて呉れた屋根、床、ストーヴ、その他に、我々は深く感謝する。

今夜は皆元氣だ。惠まれた晴天の三日の勞作（アルバイト）の收獲を語り合つてゐるのだ。又我々の珍奇な仇名の製造をしてゐたのだ厚く疊み込まれた暗の中に仄めくランプの灯影が寂しく搖れる。偃松を焚いたストーヴを取卷いてはヨードラの合唱を續ける。荒寥たる夜氣も今夜は何となく陽氣である。生氣潑剌としてゐる。人夫は三月の登山の時のストーヴの煙突のことを思出しては話す。風のための逆流で燻つて死ぬ位苦しかつたさうだ。話し終つては煙管（きせる）を床に輕く叩くのがたまらなく嬉しい。

三日の間壁の石が拔けて落ちて來さうなのを心配してゐた者もゐたが石はまだ落ちて來ない。盛に落ちる屋根からの水

滴を除けて隅に重つて寐た最初の日のつらさも今では唯一つの思出だ。今ではだらし無く廣がつて寐ては食つて駄辯り放題だ。大雪火山が破裂してもかまわぬと云ふ形だ。人間もこの位落付いて生活出來たら煩しい日常の都會に於ける文明生活の醜惡さを逃れることが出來る。この樣に簡素な自由生活の眞實さを味つたならば生命の單なる存在の外に別個な尊い想ひが浮ぶ。

この樣な平安な雰圍氣もその後間もなくより平安な寐息に占領されてしまふ。

十八日、今朝は寐坊する心組だつたが矢張り早く起きてしまふ。よい習慣がついたと喜んで見て皆に笑はれる。

今朝は愈々この小屋にもお別れだ。何だか慕かしい友と別る樣な氣がする。折角住心地よくなつたと喜んだのも後は空虛に讓り渡さなくてはならぬ。

下山の支度をする。思つたよりも早くどん〳〵片づいてしまふ。鍋類、ランプ等は梁に釣下げる。食料品その他の殘つたものは夫々石油罐につめて一隅に積み上げる。

戸締りをよくして小屋の外に出たとき誰の顏にも名殘り惜しさうな影が浮ぶ。人夫の手には再び鐵砲が光る。

蒼氷に會はずに終つたシエンクのピツケルを始め雪の上にづらりと美事に並ぶ。さて小屋を立去る時が來た。少し雲はあつたが天候は申し分無い。時に八時四十分である。

さらば大雪山よ。永久に地上の榮譽ある君臨を續けよ。なつかしき山嶺、谷々、千古の儘の崇嚴な姿、果散なき世の万衆の中に尊い永遠性を誇る山靈。我々にはどうしても彼等を足下にした凱歌を叫ぶことは出きない。懐しい人々に離れて永劫に際涯なき荒寥たる行旅に彷徨ひ出る樣な淋しい想ひ、それのみが心を占める。

スキーを擔いで再び黑岳の頂上へ出る。淡い離愁の眼を見返せばあの白い北鎭岳のスロープが映ずる。美しい自然の粉飾の中に夕陽を浴びて長い影を曳きつつリユックにあえぎながらの山歸りの黑い影を今更の樣に思出す。

風衝りはとても强い。スキーを脊負ひ東面の急斜面をクランポンにて下る。中途にてスキーに換えて白樺の林の中を滑り下りる。黑岳の頂上を出たのは九時十二分で廿丁目についたのは十時だつた。人夫の鐵砲の音を樂しみに下るいくら耳

黒岳登山小屋附近（五月）

山　縣　　浩

を立てて待つてゐても聽えないので晝食をとる。ズツペを沸するつもりだつたがアルコールには火がつかない。嘗めて見ると大分薄くなつてゐる。人夫が夜中に水を割つて飲んだらしい。

ボコ〳〵落ち込む雪の上をスキーを脱いだりはいたり展望臺についたのは十二時四十分だつた。

そこより大体夏道に沿ふて急傾斜を山道狀に下つて再び意氣昂然と出發した層雲別の鹽谷温泉へ出た。二時十分。

山から歸つた輕い氣分でその夜は心ゆくまで寢た。

その翌日、鹽谷温泉から上川に續く山道を運ぶ足も輕げに越えてゆく七つの人影と一頭の馬があつた。それは我々の山歸りの欣然とした姿だつた。（了）

白い山が見たくなつた。また山へ來る。白い山の作る神秘の國を尋ねた去年から、夢にも白い聲の誘ひを聞く、フラビヤおばさんが、美しいワンナを連れて、アペニンへ行かうと奬めても、アペニンへは私行かない。「マリヤよ、マリヤよ。アペニンの夜をきけ。夜と共にあるくアペニンを聞け」夜の樣なアペニンの黑い森にダンテの心はまよへ。ベルナの僧院苦行僧の昔ながらに額けば、聖フランスに烙印した十字架の幻影は岩かげから、かうもりのやうに懸ますてあらう。アペニンへ中世のもがく心は行け。

私は白色の禮拜にアルプへ行く。

山を知らない人が山を荒寥といふ。山に住む白い魔の聲をきかない人である。大理石の怪い誘惑を知る人が山の肌に戀をする……

矢代幸雄

如何にして安全に登るべき乎

ジョージ・デ井・アブラハム述
和辻廣樹譯

「汝の注意深き歩みを見よ」Ephesians.

「印象深い高價な自殺の方法」思ひやりのないそして一度も山へ登つた事のない友は、私達が Zermatt の上の松林を通つて大胯に下りて行く時に斯く簡單に言つた。恐ろしい、雲の渦巻くマッターホルンで起つた不幸の知らせが谷にこだいたその谷の最も勇敢な若者の中の二人が死んでしまつたのだ。そして何處へ行つても不思議な悲哀の氣が滿ちて居た。多くのアルプスの不幸な結末がそうであるかの樣に凡ての深慮と常識とは風の前に吹き飛ばされてしまつた。そして身の毛のよだつ樣な高處に於ては何人も共に住む事の出來ぬ、猛り狂つて居る嵐の惡魔は悲慘な、致命的の復讐をしたのだ。

然し、結局登山中の事變の平均數は比較的に言へばそんなに多くはないのである。近年此の點に關し事件がふへて來た事は事實である。然かもそれはアルプス登山が著しく一般的になつたと言ふ單なる自然的結果である。なぜなら十年前のどのクライマーも現在に於ては少なくとも二十歳にはなつて居るからである。冬期運動のカーニバルを通しての登山の狂的な流行が此の事變をふやすのである。とは言へ、近年のアルプスの悲慘事は、毎年平均百五十以上の人命が失はれる事を示して居る事實は明かに認められなければならない。而かも明にさるべき點は、その不幸な人達の中で登山の眞のスポートを心得て居る者はほとんど無いと言ふ點である。今日に於ては、凡ての種類、凡ての階級の男女が歐洲アルプスを訪れる。非地方的な宿が主な谷々を一掃してしまひ、そして多くの者は騷々しい群衆からのがれる爲に、よんどころなく危

險な山腹をあちこち攀ぢ、又屢々エーデルワイスやその他の珍らしい植物をさがしに出かけ、そしてクレバスの有る氷河而かも雪線以上の氷河を訪れる。愚か者はエンゼルがつれて行く事をこわがる樣な處へ平氣で飛込んで行く、と言ふ古い諺が證明されるまでは無學と言ふ事は喜びの種である。脆い雪の橋から踏み出たが最後、犧牲者も何もかも一かたまりになつてもがき苦しみながら氷河の凍れる底へ落込んで行くのだ。さもなくば又恐らくは不幸な旅人は或は山腹を横切る場合が有るだらう。雪の斜面に出會し彼は愉快そうにそれを横切つて行く、然し不意に氷の部分が現はれて來る、たちまち彼の足は滑り彼は次第に猛烈な加速度で滑り落ちて行く、そのすばらしい速さを止める助けもなく、望みもなく、遂に懸崖に來て凡てはそれで終つてしまふのである。斯の如きが所謂アルプスに於ける悲慘な終末の代表的のものである。然し眞摯な登山者に對してはその樣な事變はほとんど十五%有るか無しである。英國に有つては五%に過ぎないと言ふ事は我々英國人の誇りとさるべき事である。

私達が國外に旅行中「英國人はどうして死ぬものが少ないのか」と言ふのは屢々我々に發せらるゝ問である。英國人は最も困難な登山に依つてのみ滿足して居る。それだのに事變はめつたに起らない。答へは簡單である——なぜなら近頃では大きなアルプス登攀を試みんとする英國の登山家は最善の利益、即ちあぶない岩に對する種々の登山法や、こゝにロープの眞の使用法、處理法を得んが爲に、先づ英國の岩を攀ぢて手や足の用ひ方を學んで數年間を暮すからである。

されば高いアルプスに於ての安全な登山に對して私の言はんとする處は、先づ英國の岩から初めよと言ふ事である。斯くして氷河に於ける實地の練習や、雪線上の氷に對する練習等はのぞいて他は全て學ぶ事が出來る。而かも其等の事は英國に居る時に、全てのテクニックを前以つて學んだ者には容易に得られるのである。それにも關はらず此の點に關し先づ第一に記さねばならない事は英國のロッククライミングはアルプスに於て出會ふのと少なくも同等の危險を持つて居る事である。故 Leslie Stephen は「我々は死者の名表の長さに依つて山又は人々の威嚴を評價する事はほとんど出來ない」と言つて居る。今日に於て山に關しては此の事は眞實である。英國に於ける比較的つまらぬ。Scawfell でさへ、アルプスの多くの最も莊嚴なものよりも以上に、人間の悲劇を持つて居る。實際、人間が三百呎落ちるのも三千呎落ちるのも、結果に於ては等しいのである。

されば英國に於けるロッククライミングは充分の注意を以つて從事されねばならない。英國のロッククライミングが、

既定の運動精神となつて居る事實は認められて居る。而して、勿論、年々專門家達はより短い登行路を發見して居る。然しながら普通のアルプス登攀よりもつと困難なのが尙澤山のこつて居る。

此の事實に依り、私は初心者に對して最も良い地方は英國湖水地方の岩山の中の Wastdale Head の周圍である事を敢て言ふ。實際的登山の見地から見て全ての岩は同じである故に、普通の人間が如何にして安全に登り得べきかを全く完全に學ぶ事の出來る樣な場所は何處へ行つても無い事は決つた事である。

カンブリヤ紀の層は大變好い學び場所だ。その道すじは全ての困難のあらゆる種類のものを利用される樣に出來上つて居る。其等には手がかりや足がゝりになる處が多い。要は順序正しく先づやさしいコースからやり初める事である。幸に現在では、困難な登行に關して記述され、類別された處の全ての重要な登路の大變好い、標準的の記述が有る。最も好い計畫は之に從ふ事である。そして最も容易すい處から始め順序正しく忍耐强くやるべき事である。

Wastdale 地方の非常に有益な點は登路が多くの人に依て靴跡付けられて居る事である。重要なる登攀の交通が有ると言ふ事や似合ひの仲間達が汎く出會はすと言ふ事に依つて、其處にあぶない岩が少ないと言ふ事がわかる。之が即ち若しも Skye 地方の Sligachan に於ける Mackenzies が取除かれたならば、英國に於ての唯一つの眞のロッククライミングの案內で有る。但し前者を訪れる事はより以上に危險が少ないが。實際的に全ての戶外運動はアマチュアーによつてなされる。特にひどい方面はそうである。以上のうちのあるものは、スイスで登られたものゝどれよりも、もつと困難なのがある。そして私は、スイスの案內者中の第一番の者でさへ、彼等が生きて居る事に厭いてしまつたのでない限りは、たゞ偶然の機會で仲間になつた者とそれ等の登攀をなすとは考へられない。されば無經驗な仲間と共に英國の遙かに困難な登攀を行ふ事は、自ら求めて不幸中に飛び込んで行くに等しと云ふ事が云ひ得る。不幸な事變はこの忠告を聞き入れない時に起るのである。

ロッククライミングに對して、普通な、誰でもが有する考へ違ひは、又其が何を意味して居るかを云ふ事は共に驚くべき事である。種々の引合せがされたある一つの事變の際の犧牲に付いての問ひに對して屍体の檢死官は「登攀の爲に訪れて來る人達は、その土地の者が登らうなどとは夢にも思はない樣な場所を登らうとする」と云ふ驚くべき事を述べた。おまけに、彼はそれ等のパーティはピッケルを一本も持つて居なかつた事を知つたのだ。確りとその身を保つ事の出來るピ

ツケルなしで、誰がそんな岩を登る事を豫期出來よう。

ロープの切れると云ふ事は常に、一つの事變の恐ろしい物語りの冒頭となるものである。實際この樣な破損が常に事變の重大な原因となる事は、非常によくなされ勝ちである。恐らくアルプスのピーク上に固定されてあるロープの既によく知られて居る點から見て、此の如き出來事即ちロープの破損やなほその上に次で起る不幸は、アルプスの悲慘事が何を含んで居るかと云ふ一般的の感念なのである。しかしアルプスの固定ロープの破損が曾つて登攀に際しての致命的な不幸の原因をなしたか否かは疑しい。

登攀をなすパーティを結び付けるロープの切れると云ふ事は又別の問題である。それは屢々事變の附き物となる。而もこれは、リーダーが墜落したとしてロープが切れなかつたなら、其パーティの殘りの者は引つぱられて落ちて了はねばならないではないか、と云ふ事を一般的に意味しては居る。此の後者の問ひはロッククライミングの絶對的の安全、又はその他の事に付いて懸念を起させる。この點に關して、登攀を始めたばつかりの者に對して有益な暗示があると同樣に、まだ始めない者にとつてもこの說明がないでもない。

例へば Scawfell Pike の傾斜面から Scawfell の大きな面を眺める者は明に、殆んど出張りの無い崖を見るだらう。人間が其滑々した大きな崖を攀じる事は、到底不可能な事に思へる。而も其處には多くの、各自の好きな道や、殆んど一般的な登路があるのだ。よく調べれば、實際的に全ての崖がそうである如く、例へ最も恐ろしい外見を持つて居ても、この Scawfell の崖は大小無數の出張りを持つて居る事がわかる。登攀を困難にしたり容易にしたりするのはこのレッジの數や大さや、狀態やである。ロープで各々を結び付け、熟練したリーダーに從ふパーティは、例へそれは廣大な背景中にはたゞ小つぽけな虫けら位いにしか見へぬだらうが、直ぐにこの Goliath 山のまるで兜の樣な所で、小さな特別な場所を見付け出すのである。最も熟練した人が最初に登らねばならない。そしてある適當なレッジ——それは多分登り出してから二十呎か三十呎上にあるだらうが——其處で彼が確りと留る事が出來、二番目の者の登攀中ロープを確かと保つ事が出來る處まで登らねばならぬ。而して、第三番目の者が登る前にリーダーは、又ロープで確りと保れながらもう少し高い所の安定な場所、術語を使つて云ふならば投錨地に登るのである。

二番目の者は注意をしてリーダーの登つて行く道筋を見守り、そして大低は岩の瘤樣の所へ卷きつけながら、ゆる〳〵

と彼のロープを延ばすのである。それ等の出つ瘤の岩の大さは、エッグカップから田舎の教會の尖塔位いの大さまであるが、其はロープを巻き付けるもの或ひは纜耳(ラシビ)として知られて居る。これ等のものの無い登攀路は、常に登攀をして不安にせしめる。實際に云へば、その樣な場所の登攀は正しいものとは認められない。

纜耳の有益なる事は、Wastdale 地方に於ける最近の事變のうちの一つによつて明かに證明されて居る。それは一九〇九年の事である。比較的經驗の淺い若い登山家の W. Rennison はGreat Gable の Eagle's Nest Ridgeを、あるパーティのリーダーとして登つた。其れは英國に於ける登攀中の最も困難なものの一つである。そして其下方の切斷せる所は殆んど百呎に近い高さの岩の垂直な面から成つて居る。登攀を始める所の直ぐ上には、非常に困難な部分がある。此はリッジの頂點の足場を効果有らしめる樣に出來上つて居る。このリッジといふのは、向つて右側から約二十呎の高さの急峻な岩壁を攀じて達しられるのである。リッジへ到達する點の下では、リーダーの左側の岩は下方に傾斜し、そして空中に掩ひ被つた樣になつて終つて居る。リッジへ體を持たげる爲には、たゞ非常に小さな、手先のかけ所しか無い、そして足は空中にブラリと下げるより外には何も出來ない。

リーダーが、彼の仲間の上方十二呎あるかなしの時に滑つたのは、此の短いが併し困難な登攀路に於てである。突然、一聲も發せずに彼は左側の掩ひ被つて居る岩を越へて落ちた。幸にも二番目の者が岩の瘤へロープをぐる〳〵巻き付けて居た。が然し其はリーダーの墜落の爲の張力をもち堪へる事が出來ずプツツリ切れてしまつた。

此場合もしロープが丈夫だつたら悲しい結果は起らずに濟んだらう。此れに類似の事變が最近屢々起つて居る故、殊に英國外のロッククライマーの間に起つて居る故に、こんな特別に短い部分を登るリーダーには二本のロープを結び付けるとこの樣な方法は疑ひもなくなさるべきである。Eagle's Nest Ridge に於ける如く、立派な安定な場所が得られる所にあつてはこの樣な方法は實際的の注意を促すものである。極初期の頃には此の樣な保護法は、決して眞に研究はされては居なかつたが、用ひられては居た。併して現今ではこの方法は新しい事であり、又一般の登攀者には知られて居ない樣に見える。

Eagle's Nest Ridge に於ける慘事は、リーダーが二番目の者の上方の可なり高い所から墜落した場合、ロープの役に立つ事の如何に少ないかを示して居る。英國山岳會の新しいロープ——他は用ひるに足らぬ——は、空中十呎の高さを落ちる百七十封の重さの人間を確りと持ち堪へる事が出來る樣に試驗されてある。ロープに重さがかゝると殆んど同時に、或

るレッジに落ちて奇蹟的に助つた場合がないでもない。が然しどちらにしろ、リーダーは決して滑る樣な事があつてはならない。彼は確實に其パーティの最後の登攀者たるべきであり、又數年間の實地經驗を有して居る可きである。恐らく特別な自然的才能によつて、彼に與へらるべきリーダーシップの名譽と責任感とは益々增大されるだらう。

もしもリーダーがかつて落ちた事があるとわかつて居る時には、その者がリーダーの位置を退かぬ限りは左樣な者と共に登つてはならない事を。私は全ての登攀者に斷然と警告する。

ある登攀中には墜落した岩の一寸した塞ぎの爲に進路を塞がれてしまふ事がある。その岩を越す爲にはリーダーは、辛棒强き二番目の者の脊によつて、又は頭によつてさへも登らねばならぬ。平頭釘を打つた登攀靴はかくして彼等に永久に續く深い印象を與へるだらう。然しそれ等は名譽ある傷痕なのだ。著者は曾つて友の鼻の上について居る靴の傷痕を見た而もこの相互の助けが偉大な報酬を考へさせたと云ふ事によつて成功がなし遂げられたのだ。

リーダーたる可き者が常に心得て居らねばならぬ重要な點は、落着いて登る事、手よりもむしろ足を使ふ事、又登る事が不可能である限りは非常に困難な所は登らぬ事、そして此の目的の爲に常に精力を貯へて置く事等である。細密な注意は、どんな小さな隆起所に對しても、それを取り卷くロープが滑るかを見守らるべきである。非常に困難な場所に於てもリーダーは、かくして安全を保證せられるだらう。極端に云へば墜落と云ふものは、かくロープを結ぶ事によつて屢々安全に處理される。

なほ又困難な裂け目を攀じる時は、小さな岩は屢々裂け目の中へ割り込んで居る故、ロープはそれ等の岩の脊後を縫つて通される。有名な最初の登攀のあるものは、この安全な先導によつてのみ可能であつたのである。極小さな岩の出つ張りに立つて居る時、腰を直接にロープの端で結ばずに下から其れを岩の後に通し、しかして後再び體に結び付ける事は屢々出來得る事である。もしもロープを通した岩が確りして居るなら、それはリーダーにとつては十分に安全な場所である例へ氣を許るし注意を怠つても、もし下の者がロープを確りと保つて居さへすれば彼は少しも心配する事なく空中にぶら下られるのである。そしてリーダーがより高く登つても、彼は恐ろしい墜落に對して少しの心配もないのである。併しロープが岩の脊後を通つて自由に働いて居るかを確める事は必要な事である。

全て之等の方法や助けは、安全なロッククライミングの技術の安全と云ふ點に與つて力がある。而して知識や熟練さの

進むに從つて、アルプスに於て多くの非常に困難な登攀を行ふ傾向が生じて來る。この進歩は Mont Blanc の氷河に蔽はれた斜面から尖つて突き出て居る針の樣に尖端の細い峰に於て起つたのである。

一九一一年の八月、非常にいゝ狀態のもとにある驚くべき功績がなし遂げられた。そして從來不可能とされて居た場所が登られた。殊に名高い Aiguill de Grépon と Peléret に隣なるピークとに於てなされたのである。然し翌年早くもこれ等の花崗岩の巨人達は人間に慘事を與へてしまつた。大膽な登山は恐ろしい慘事に終末を告げた。そして全てのうちで最も驚くべき事は Mont Rouge de Peléret で H. O. Jones と彼の妻 Nicholas Truffer との死んだ事である。事變は既に主張されて居る通り先導の案内者の墜落に原因して居る。

此の事變に於ては Truffer が Aiguille de Peléret の Mont Rouge Ridge の前まで先導して登り、次に婦人登山者。最後に熟練なる英人が續いてゐた。墺人登山者 Dr. Preuss は一番先になつてゐたが不思議にもロープに連なつて居なかつた。幾回かのトラバースをしなければならない尙その上に危い岩が多い時、こんな事をした理由が全く了解出來ない。

總ての人がロープに連なり、正しい方法に從つてゐたならば、かゝる事實は殆ど起らなかつたに違ひない。先導が先づ（多分支えが緩かつたためか）滑り自ら支え切れなくなつて、二人の友をひきづりながら死に落ちて行つた。彼等は一千呎下の Fresnay Glacier まで投出されてゐた。同名を有する偉大なる兩登山家が、先導する者の滑つたゝめに（そう思はれて居る）慘死しなければならなかつたと云ふ事は奇妙な一致である。O. G. gones 及四人のガイドが失はれた時、Dent Blanche 遭難の原因はこれであつたと云ふ事が思出される。Dr. Preuss を始め其の他不幸なパーティのメンバーは翌年やられた。彼は從來攀られてゐなかつた Salzkammergut 中の難物なる岩のピーク Mandlkogel の北面を、單獨登攀をしてゐた時落ちた。

近時のアルプスの危險、先導するガイドの墜落は、認められなければならない。如何に一般の英人が職業者に信賴してゐるかは驚くべき程である。熟練な人々が出て行つて、餘り巧でもなく、且むづかしい岩を攀じたこともないスイスの農夫をしてどんな所へでも案内せしめる。Mont Rouge Ridge に於て唯一卷のロープさへ卷きつけてゐたならば彼等の生命は助かつたに違ひない。されど悲むべき過ちと云ふものは見越す事が出來ない。私は切に忠告する。むづかしい登攀をなすに當つて決して婦人を二番目をおくものではない。こんなことから幾つかのパーティは失れて行つた。むしろ最も強い

最も確實な人を以つて、この重要な位置につかしめ、絶對的に、且最も巧な登攀者を以つて先導せしめ、内外何れを問はずロッククライミングに於て冒險は最小限に減少せしむ可きだ。

高いアルプス即スノークラフトやアイスクラフトがロッククライミングより多く要求せられる樣な所に於て、如何に安全に登る可きかと云ふ問題になつてくるとやゝ異つた點が重要になつて來る。永久に雪を以て被れた廣い世界、大きなアルプスのピーク、其處では登山者は道程に於て絶えず起る過ちに重い責を負ひつゝ、人の力のみを賴に幾時間か岩を刻む。かゝる所に於ては事情が全く變つて來る。「時間」がアルプスに於ては非常に重要なものである。時を最も有効に利用し、雪氷の一般の狀態及天候を如何に最も有効に利用するかの知識が、安全な登山をなす爲には非常に重要なものである。

ハイ、アルプスに於て安全を期するには、先づ第一階級の案内人が一番必要である。此の如き選擇は無經驗な者には幾らか厄介な事であるかも知れない。ことに餘りふところの豊かでない人にとつてはさうであるかも知れない。案内人の多くは金持のパトロンと旅行する事によつて散々になつて居る。それ等パトロンのうちのある者の如きは、たゞ靴の紐を求める時でさへ突拍子もない高い仕拂ひをする事でよく知られて居る。私もかつてあるピークで、たつた二人の案内人の元氣を引き起す爲に約百五十フラン以上も拂つた事がある。とは云へこの樣な傾向は漸次人々にも知られ又改良されて來た。職業者のうちで特にさけねばならない階級のものが二つある。一つは事變を起す事で知られてゐるもの、他は仕事の賃金に汲々として居るものである。ホテルでは屢々職標に照らした案内人をおいて居る。その案内人達は一向誰からも顧られない所の面白い推選を受けて居る者達である。一度對面してからその者を雇ふか否かを決める事は大變いゝ事である。そして年寄りにしろ若者にしろ、熟練した者は常に見込のある男として見られるものである。

近頃、雪線以下の岩に對してのみ熟練して居る若い登攀者に、案内人なしでより小規模なそして恐らくはより簡單なアルプスを登ることを推める傾向のあるのはなさけない事である。事變の殆んど八十%は此の如き小規模なピークで起つて居ると云ふ事は忽せにさるべき事ではない。案内人なしの登山又一萬呎以上のアルプスの何れかをたゞ單に歩るくと云ふ事だけでも、大きな山、そしてそれ等の恐ろしい性質や構造に就いて研究した後でなければ、決して行つてはならない。夏、冬、英國でロッククライミングに關し研究した者は、第一階級の案内人と共に二シーズンを過した後、ハイ、アルプスに於ける案内人なしのクライミングを行ふ事が出來る。

熟練、常識、そして深慮とを以つてすれば、ある二つを除いて、高山に於ける全ての危險に大丈夫打ち勝つ事が出來る。その二つの打ち勝ち得ぬ危險と云ふのは、天候の急激な變化と、墜落して來る石とである。

高い山で數時間かくれ場所もなく、助けもなくて嵐に出會す事は實に恐ろしい經驗である。ユングフラウを好き、そして彼の女の氣むづかしい性質を知つて居る人は、この大きな白い處女が天候に關しては最も危險なものゝうちの一つである事を承知して居る。恐らく彼の女は黎明の光に照されてにこやかに微笑むだらう。然し陰慘な前兆は高々とその上方に眺められる。そして晝前には嵐は廣大なスノウフィールドを横切つてたけり狂ひ、又打ちおのゝいて居るリッジに向つては容赦なく物凄い叫びをあげるのである。其がユングフラウや彼の女の優しい友達等が最後の抱擁をもつて彼の女達の犧牲者を相抱いてしまふ時なのである。

即ち朝には健康と喜びと生命は高所に於ては住む事が出來るが、今や恐ろしい死が慘忍な圍みの中をしのびよつて來るのである。不注意な何も知らぬ不用意な人は安々と Tourment の犧牲となつてしまふのだ。

次に述べる一事は近頃の特徴的な事であり、又重要なるメソードである。ある二人のみのパーティがあやしい天候の日にユングフラウへ登りに出掛けた。が彼等は見えなくなつてしまつた。彼等を捜したが少しも見付ける事が出來なかつた捜索隊は二人の内の一人が生殘つて居るのを見出した。彼は嵐の日にも唯一人で登つて居たのであつた。

豫想出來ぬ突然的な天候の變化に際して起る事變と、又やたらに頑張つて明かに悪い又はあやしい天候の日に大きな山を登る樣なパーティに起る事變とは區別する必要がある。前者は避け難いが後者は、用心といふものを賭ける賭博の樣なものだ。近年の慘事はこの樣な登山に成功した人はめつたに無いと云ふことを示して居る。此の如き登山は常にアルプスに起る不幸の最もよくある原因となつてゐる。私は、それを實行するには多大の意志の力を必要とするが、悪い天候の後は三日間の晴天が續いてからでなくては大きなピークは決して登つてはならぬと云ふ事を常に安全な主義として居る。

他の避け難い危險即墜落して來る石や、氷の危險は、毎年の知らせとなつては居るが其平均數はずつと少ない。雪崩に關してはこゝでは述べまい。なぜなら彼等の慘劇はよく知られて居り、又容易に避ける事が出來るからである。然し、太陽や氷結の作用によつて山側から落ちて來る岩や氷に就いては比較的に述べやう。「人は登攀中不安定な石に關しては立派な地質學者の如くに行動す可きである」何れにしろ純粹の風化作用が眞の原因である。そしてこの作用は晝を過ぎると

より急速に行はれる。この點に於て危險な場所は、午後は一般に避け得る又避けらるべきである。危險な地帶は二つの代表的なものはマッターホルンの Great Stone couloir とヴェッターホルンの couloir とである。この二つのピークで死んだパーティは數限りなくある。どのシーズンに於ても此處は、嶺や脊から落ちて來る岩が比較的に多いのである。

萬年雪の中にひそかにかくれて居るそれ等の避け難い危險に關しては、登山者は他人の過ちから如何によく學ぶ可きかといふ事を敎へてくれる詳述がある。近頃の記錄から察して見るに單獨登山は增加して居る。併し之はあまり正しい事でない。

大きなスノウピークに於ては單獨登山者の危險は尙增加する。高所の氷河は屢々裂けてクレバスを作る。時としては數百呎も深さがあり、しかも屢々騙され安いもので被れて居る。又時としては雪が一樣に見える事がある。これ等のかくれたクレバスを見付ける事は困難である。そして午後に於ては、特に太陽がクレバスを被つてゐる雪を柔かに照らして居る時は、どれもこれもが單獨登山者にとつては恐ろしい死の陷穽である。

かくされたクレバスに墜落する時に起る事變の數により之等の危險は誇大されて來た。併しこれ等の危險は、ロープの眞の使用法に依つて避けられるのである。先づパーティは三人以上のメンバーによつて成り立つ。全部の者はロープに連なり、クレバスのある所をよく心得て居る所の先導のガイドが先頭を切るのである。そしてパーティの各々の者は片手にロープを持ち、あたかも前方の人であるかの如く思ひながら、先頭の足跡に從つて正確に行動せねばならない。誰かが偶然雪の橋を破つてクレバスへ落ちたとしても、たゞ僅かのロープの引張りが危險を助けるのである。

これに關し、もし一人の登攀者がクレバスに墜落した時、たゞ一人の人で彼を引き揚げる事は到底不可能であると云ふ事は注意されねばならない。それ故高い山では二人のみでは大變な冒險に決つてゐる事は明な事だ。それだのに年々人々はこの危險を蒙り、年毎に生命が失れて行く。

そう昔でもないが二人の熟練した歐洲大陸の登山者が Weisspitze を登つて居た。彼等は如何にクレバスがスノウ、フィールドを切つて居るかを見る爲に、正しいやり方で左右を見廻しながらゆつくりと歩るいて居た。雪はクレバスが下にある時には、常にかるく下方に傾斜して居る。そして熟練した者にとつてはそれは容易に認められる。そのリーダーは注意してその樣な雪の上を渡つた。と突然彼の乘つて居る雪はくだけ氷河の眞暗な深みへ落ち込んだ。不幸な彼はその雪と

共に落ちた。クレバスの緣に居た彼の友は、丁度彼のピッケルを雪へさし込んで、墜落を防ぐ爲それにロープを卷き付けてゐた。

然しリーダーの落ちた張力のためにピッケルは雪から引き拔かれ、上方の彼は必死にロープを摑みながら胸を下に引つ張り倒された。斯くして彼は約卅分間も横つて居た。たゞ彼の大きな力と、不屈の勇敢さとが、彼の底知れぬ奈落へもがき落ちるのを止めて居た。彼の助けを呼ぶ聲には何の答もなかつた。そして彼は次第々々に前の方へ引つぱりよせられて行つた突然その時、彼はクレバスの中の哀れな、死の宣告を受けた者の恐ろしい命令を聞いた。「ロープを切れ」ロープが切れた時彼に聞へるものはかすかな呻り聲のみであつた。間もなく生殘つた彼は助けを求めた。搜索隊は惡い天候の爲手間取つたが遂に此不幸の起つた地點に到着し、殘存者を見出した。

大きなピークの多くのリッジの端は屢々くだける氷結した雪のひだを頂いて居る。上から其を見出すのは困難な事である。而してそれ等のひだは一般に最も容易な登攀を與へる故に、登攀者等は屢々コーンアイス(崖等に氷結して下れる雪)からリッジの急な斜面に沿ふて居る安全な所を登る。

最近に起つた事變の一つは、それ等雪のひだの危險に重きを置き、又同時に如何に登攀者の心の落着きが多くの人命を救ふかを如實に說明して居る。それは Monte Disgrazia の峽い隆起所で起つた事である。パーティは Milan から來た若い四人の學生から成つてゐた。大きな氷雪のひだは明かであつたし、全ての者は用心深く行動した。頂上は目の前だし、成功は殆んど得られたも同樣であつた。

突然、リーダーの Arrigo Truffi は彼の後方に大きな音を聞いた。殆ど直覺的に彼は危險を實感した。氷結したリッジの多量がこはれ、それと共に彼の友は底知れぬ深みへ見えなくなつた。いち早く彼はリッジと反對側のよりひどい傾斜の方へ飛び下りた。彼の墜落は勿論ロープによつて止められた、そのロープはピークの雪の冠をつらぬいて吊られて居るのだ

他の側では彼の仲間の墜落が止められた。たゞし氷の面に向つて何の助けもなかつた。されどロープはこの大きな張力で切れた。而もそれは哀れな最後の男 Ettore Levis 一人を切り離してしまつた。彼の恐怖に打たれた仲間は、その下方遙かに人間の小さな黑點が、雪の崩れの樣に雲の叫び狂つて居る中をそうして見えなくなつて行くのを見た。二つのバウンドと共に、彼は直下三千呎の Disgrazia Glacier に落ちて行つた。

幸ひにも殘存者の一人はピッケルをまだ手にしてゐたので、此の助けとTruffiの助とによつてリッジの頂點は極められた。彼等はたゞちに下つた。そして三日の後、彼等の死んだ仲間は勇敢な捜索隊によつて運び下ろされた。その捜索隊のDisgrazia glacierに於ける危險な冒險は少くとも救助者の一人に恐ろしい不幸を蒙らせた程だつた。このEttore Levisが死んだのはMonte Disgraziaに於ける最初の犧牲であつた。然しリーダーの大なる沈着なかりせば、此の死の知せは四人が一握みになつて落ちて死んだ知らせになつたであらう。

登攀に成功して下山した後の大得意の中に防害なしに見渡せるスノー、スロープを滑り降る大な誘惑がある。登攀者は傾斜面に對して殆ど直立を保持し、ピッケルを以て齒止めの樣に而して又操舵の手段として背後に使ひながら下方に滑るにまかせるのである。然しながら此の下山の面白い手段には危險が澤山ある。滑走者は突然、氷の多い部分を通り過ぎるかも知れない。その部分は例へば岩が太陽の柔い光線から雪を庇護して居た所かも知れない。彼は筒口から出た彈丸の樣に飛びはなれるだらう。而して若し岩か或ひは深いクレバスが下にあるならば、彼はおそらく彼の餘生を下方の彼の世で過すだらう。大なクレバスが大口をあけて居る深淵は度々スノウスロープを横斷して居るが、一般には上方からは見えないのである。

滑走の事變の多くは、登りに用ひたと異つた道程に依つてピークを下る登攀者に起る。この關係に於て健全なる忠告は「君が以前に登つたものでなければ決してスロープを滑り降つてはならない」と云ふ事である。

最後に私は主張する「徐々たる登攀は安全なる登攀である。そして自分に適して居ないと疑つた時、危險なコンディションだと疑つた時には直ちに引返へす事である」。

登山はその熱烈な信仰者に對しては多くの報酬を與る。殆ど打ち勝つ事の出來ぬ壯嚴な光景の中での素晴しい訓練はたゞ眞の男らしさに訴へるばかりである。然し醫學上適當せる事や高所に於て貯へられた完全な健康は登攀者を打ち負かさぬ故彼は重力と云ふ同情無き自然の法則を忘れてしまふ。英國に於ても英國外に於ても、如何に安全に登るべきかを學べる登山はたゞ注意と深慮と鋭い觀察力とに依つてのみなされ得るのである。(終り)

エミイル・ジャヴェルに

大島亮吉

八月になつた日の暑い午後
私は一冊の本を手にして外出から歸つてきた
それは極く確かりした裝幀の
茶色の背皮に金文字を入れた小形の本だ。

これと同じものが私の書齋と共に失はれたのは
もうすぐに一年にもなる前の日のことだ。
はからずもけふまた私はそれと同じものを
再び私の机の上に置くことができることになつた。
佛蘭西風のあの輕い紙裝のものにかへて
その中身にふさはしい古めいた重々しい裝いのものを。

私はうれしかつたので
早速ペンをとりあげて
扉のまへのブランクの頁に
思はずも恁う書きつけた。—

à souvenir de Emile Javelle, 1 aug. 1924.

けふから、また私が
こゝ、日本の騷がしい都會のまんなかで
あなたのあの穩かな、謙虛な文字の上に溢れる
あなたの山への熱想と
その清純典雅な風格に
そしてまた
靜かな書齋の一隅で
ズボンのかくしに左手を入れ
右手は机の上に肘づいてどつしりと座り
頬鬚ゆたかなあなたの顏を
すこしかしげてこつちに向け
その穩かな眼のみあらぬ方を凝つとみつめてゐる
あの思索好きのあなたにふさはしい
その氣質的姿勢のあなたの肖像に

再びしみ〴〵と接することができるその悦びのために。

おゝ、エミイル・ジャヴエル！
モン・セルヴアンの第七回目の登頂が
あなたの名を永くは記憶させない。
あなたが手づから積み重ねた
トウール・ノアールの頂の積石が
あなたの初登山を記念して
永久にとゞまりはしない。
アルプ・タランテーズのポアント・ドルニイも
ダン・デュ・ミディのあなたの新しい徑も
ともにあなたの名を深く人々の胸に植えつけはしない。
けれど、あなたの今は無い妻は生きてゐる！
あなたの人格の風は吹いてゐる！

トウール・ノアールの頂にはじめて立つて
その高い額を山巓の風に吹かせつゝ
すべてその後そこに來るものを慈んで歡喜したあなた。
ゴオをして「風景のうちに歩みいるひと」と言はしめた
そのコンタンプラチイーフな態度で山を登つたあなた。
孤獨の友となり、寂寥の伴となつて
隱棲と放浪とに生涯の隱れ家を求めたあなた。
それらのあなたがあたなをしてあらしめるのだ！

あなたの山々へのなごやかな心の波うちが、
あなたの熱意に充ちた自然への親實さが
僅か乍らこの私の胸にも傳つて以來、
またあなたのいつくしみの眼のかゞやきが、
私の瞳をうるほして以來、
私の瞳は更に一層山々の姿をば
部厚なものとしてうつすやうになつた。
いまこそ、更に身近く私はあなたに近寄れる！

これからやつてくる空氣の澄んだ秋の夜に
私の机の上に開かれたあなたの本の上には
登山者としてよりは哲人としての
あなたの言葉が澄むだらう。
そして、あなたの蒼空のやうに深い瞳が
その秋の夜の靜かな燈の室にかゞやくのを
私はいまから待つてゐる！

MCMXXIV. VIII. XXI

山岳及びスキーの身体に及ぼす影響とそれ等に依つて起る負傷に就ての研究

本田治吉

緒言

自分は之を書いて、或はこれを讀まるゝ方々に不安を與へやせぬかと云ふ心配を心に感じ乍ら筆を執らねばならない。と云ふのは、世間にはよく、スキーをやつて足の骨を折つたのを見るとか、スキーで山へ行くとか、或は單に登山をやつて、不幸に遭遇したとか云ふ場合があるとすぐ「山は非常に危險だから山登り等は止してしまへ」とか「スキーは非常に厄介な運動だから止してしまへ」と云ふ樣な事を云ふ人を多く見受けるからである。斯ふした事は單に山やスキーのみでなく、他の凡ての運動に於て見聞する事實であると思はれるのだけれども。

スポーツとしての運動のみでなく、凡て靜止の狀態を脫して Bewegung なる言葉で表される運動には、必ずそれに相當して多少の危險 Gefahr が伴ふ事は明な事實である。否靜止の狀態でも、必ずしも全々危險がないとは云ひ難い世界である。例へば足駄を穿いて歩いて居ても、一寸石ころか何かに躓いて怪我さへする事がある。況やそうしたなまやさしい運動でなく、烈しい運動に於ては、多少の危險の伴ふ事は免れ得ぬ事と思はねばならない。然もスキー及び山岳は他のスポーツに比して、非常に眞劍な氣分でやらねばならぬ一寸時でも油斷のあつてはならないものである。或る場合には命懸けの事さへあるのである。從つて斯ふした危險を賭けてやる丈けそれ丈け、それに對する報酬として快味を多く感じ、眞の

味を知る事が出來るものである。

斯く論じて來ると、先きに云つた樣な人は、一も二もなく斯ふした種類の運動の非なる事を主張して止まぬであらう。自分の心配する所はこの事なのである。自分は此の研究を書いて、スキー及び山岳は危險であるから之を避けよとか、或は止めよとか云ふ心は微塵もないのである。否却つて、此の種の運動の普及と發達を希ふ者の一人である。自分達の仲間の者は、よく「病み付き」と云ふ。自分もやはり此の山とスキーには病み付いて、到底癒らぬものゝ一人である以上、何うして、自分の好きなものゝ不利な事が公に出來るものか！

凡て何事に依らず、有利と不利はある。只有利の不利に比し大なる方を人は善として之を喜ぶものである。今や種々の運動の世に廣く推奬さるゝ以上、之等の運動は必ず有利點の大なるものであらねばならぬと自分は信ずるのである。而て何運動によらず、之に危險が伴ふとすれば、其の危險の如何なるものであるか、又然らば其の危險は如何なる場合に起り如何にして來るか、と云ふ事を知つて、之を豫め避くる樣にし、而て又其の運動の如何に我々の身體に體育的或は精神的に効果を及し如何なる利益を齎らすかを知りて、その有利な點を利用するのが本當であると思はれるのである。斯ふした意味に於て、自分は山及びスキーの身體に及ぼす影響と之より生ずる負傷の種類、起因等に就て少しく述べて見たいと思ふのである。

◈登　山 (Hochtouristik)

（初め斷つておきたいのは、登山と云ふ言葉を用ひてもこれは、小さな遠足がてらに登れる樣な山よりは、却つて山岳と云つた方の山へのそれを多く意味して居ると云ふ事なのである。）

(一) 登山の身體及び內臟器官に及ぼす作用

山岳登山は他のスポーツ等の樣な性質のものではない。登山は決して人類の敵を相手にして、之を征服せんとする樣な競鬪と云ふ樣なものではなくして、自然そのものに向つて入り、自然の心と自己の心の融合を見出すものである。從つて身命を賭して居る。故に他のスポーツの時用ひらるゝ肉體上、及び精神上の緊張努力と云つた樣なアルバイトは登山に際

しても決して劣つては居らない。

今此の登山の身體に及ぼす作用を見るに、その影響の他の種類のものに比して、遙かに大なるを知るのである。殊にその身體、臓器の何れに最も多く影響を及ぼすかと云へば、それは心臓に於て最も大である。今それ等を簡單に順に擧げて見やう。

一、血管系統に就て

血流、血流は促進され、脈搏は早く多くなり、一分間約一二〇—一六〇を數へ、而も長時間持續する事が多い。然し血壓は多くの場合上昇する事なく（あつても非常に少い）又脈搏不整など云ふ現象は起らぬ。

心臓、心臓は多く肥大し、打診的檢査に依る心臓の大さは主に外側（左）に增大す。（約一—二cm）極端にひどくアルバイトせしめ心臓機能を害せるものに於ては、心筋炎とか心臓閉鎖不全症等を引起す場合多しと云ふ。然しこの%を見ると他の種類のものに比し遙に少い。他のスポーツも同樣に運動して直接影響を及ぼす所は心臓であらう。或る學者の實驗による結果を引用する時は、明にわかる事と思ふ。實驗に供せる人は五十一人の多年困難なる登山（二八年間）を經驗し來れる人々（平均年齢24.9g. 身長1.69m. 體重66.0kg 胸巾 24.8cm 心臓横徑 11.7cm）である。之によると、普通人の心臓の大さに比し、非常に異る數を示すものである。

表　一及二

TABELLE 1

肺巾 cm	心臓横徑 cm	普通 cm
20.1—22	10.6	10.5
22.1—24	11.3	11.1
24.1—26	11.9	11.7
26.1—28	12.7	12.3

（第一表は、肺巾に對する心巾の變化を普通人に對する比較、第二表は51人の山岳登山者に於ける心臓擴大の%を示す。）

TABELLE 2

	心臓擴大の%			
	0.6—1cm	1.1-1.5cm	1.6—2cm	總計
51 Hochtouristen（山岳登山者）	1.6%	6%	1.8%	9.4%

血液所見　赤血球數增す。（發汗の爲め水分不足を生じ血液のプラズマが他に出る爲めの結果と考へらる。

二、呼吸器系及び其他一般

呼吸　呼吸深くなる。（空氣の稀薄と過度の活動の爲め）

體重　體重は減少する。而て小便は發汗の結果濃厚となり（S.G.一〇三〇）一時的ではあるが蛋白質が少量小便中に見らるゝ事あり。

高山病　所謂高山病と稱するものにして、多く酸素の不足、精神的、物理的或はテルゝ地方(Tellurische Gebiet)に關係するものらしいが、高度の疲勞、强度の弛緩及び昏眠、頭痛、惡心、嘔吐、呼吸困難と云つた樣な病狀が表れて來る事がある。

（二）登山に於ける負傷

山岳登山に於て發生する負傷其他をその原因に依て分つて、大體三種とする事が出來る。

A.登山動作に依つて引起さるゝ負傷

B.登山用具の爲めに起る負傷

C.周圍の大氣の作用による負傷

以上三種各その怪我の仕方、種類を異にし而も各特長あるものである。以下順に各項を述べて見やう。

A.登山動作に依つて來る負傷

山岳動作は主にクレッテルングとアイステクニックであらう。極く輕度のもので第一に考へられるものは、此のアルバイトに於て使用さるゝ機關、例へば足及膝關節の筋肉等が過度の勞働と緊張とによりて、筋痛を呼び起す。即ちアヒレス腱の過勞から、その腱炎を引起したり、アヒレス腱の切斷したりする事がある、又靴のあまり小さすぎる事から刺衝を來す事等もあげられて居る。其他それ等の事から、俗に云ふ「豆」が出來てこれが破れて痛みの爲めに參る事もある事は衆知の事であらう。

特種の負傷としては、筋肉を包で居るファスチアが直接及間接の原因により破れたりして、その間から筋肉がハミ出したりする事もあり、又粘液嚢ミて、關節とか何かの摩擦の多いヶ所にあつてそうした事をさける道具があるが、之等が登攀等には可なり用を爲すと見え、その要求に從つて新しく出來る事もあり或は過勞ミか不適當な使用とか等の悪いコンデションの時に、ひよつとして炎性となる事さへある。（主に膝の内側ミか、リツクサツクのヒモの常に當る肩の上ミか云ふ樣な所）又之等の所に皮膚の炎性から、痛みを感じ赤く腫れたりする事もあるが、大抵は輕く良性のもので、少し之の原因を取り去るとか一寸した手當ですぐ治癒する。

クレツテルングの定型的の負傷は、手及足の指先の負傷と墜落による負傷ミであらう。手足の指先の負傷とは、即ちクレツテルングには何と云つても手足の力を便に之を支點ミしてアルバイトする事が多い。然もクレツテルンするフエルゼが險しく到達が困難なればそれ丈け手と足を共にアルバイトさす事は明な事で、而もⅡ、Ⅲ、Ⅳ、の指に最も體重がのる。從つてその指先が險しい岩かど等ですりむかれたり、小さな砂粒等が入つたりして、それに指先は神經にとみ血管に富むものだから、その痛さや刺戟受性がひどくなり腫れて來る事さへある。ひどい時はこの傷から黴菌が入つて化膿する事もある。

クレツテルング、アイステクニツクは實に自分自身の體の支へや位置がすでに危險な狀態にあるものである。或は指先と足先で體を支へたり、ザイルに體を支へて空中にぶら下つたり、或はピツケルにより體を支へたりする。故に一寸した拍子に足場を失つたり、氷やフイルンの上を辷つたりして、或は亦全く免れ得ぬ天災の爲めに（電光、岩石がおつこちて來て打たれる事或はザイルが切れたり、ラヴィネの爲め）高い所から谷底へ墜落し、遂には大切な生命さへ失ふ不幸事に遭遇する事がある。然して此の事實は山岳登山に於ける不幸の中最も多く見せらるゝものである。

此の墜落による負傷には、これと云ふ特長はない。何しろ非常に高い所から墜落するのであるから、スキーの樣に斯う云ふ風なころび方をすれば斯う云ふ風な骨折をすると云ふ樣な特種の現象は見せぬ。只其の死後の客觀的の所見を見れば大抵骨折、脱臼、内臓の裂傷等に歸因して居る樣に思はれる。然し多くその墜落の度がひどければひどい程高所からならそれ丈け、負傷の度は烈しくして、大抵地に落ちて靜止するまでの中に、參つてしまつて居るらしい。

墜落の結果、死に到らない迄も、骨折（98％）や其他のひどい負傷は免れず（然し何か只一の臓器のみに負傷が限られ

る事は稀である）斯うした場合多く見られるのは、血尿や蛋白尿とて小便の中に血が混じたり或は蛋白質が多く出る。然し大抵は短時日で消失して普通と變らぬ樣になる。

今ザール氏による最近十年間に於ける（一九〇二―一九一二）アルペン登山中不幸墜死せる人々の數の統計を見ると次の樣な數字を示して居る。

1902	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911
70	76	72	56	58	85	108	115	109	143

此の數の增加は勿論登山者の數の增加にも依るが、他方又登山者が年々困難な登攀を試みる樣になつた事實に歸因するミ氏は說明して居る。而て之等の不幸を總體的に見るに多くはフューレル無しに登つたり、自分の不注意によつて一大事を引起せる場合が大部分を占めて居ると云つて居る。勿論これをそのまゝ信ずる譯にも行くまいけれど、その事は大に考ふる必要があると思はれる。

B. 登山用具の爲めに起る負傷

此處に擧げたいのは主にザイル、アイスピッケル、スタイグアイゼン等である。

一、ザイルに依る負傷　これは主にザイルの下手な使ひ方をした爲めや、ザイル使用中不可抗力な力の爲めに來る火傷である。今更自分が說明する必要がない程、ザイル使用には手足の使用が力を爲すものである事は明な事である。即ち手及び足で體のザイルを傳て降る加速度を制限したり、或は一人がアップザイレンする時、他の一人がこれを支へて居たりする。その時ザイルが手の掌を辷り、そして體とザイル間に生ずる摩擦から熱を生じてその爲めに火傷を起す事がある。此の特長は特に强くザイルを壓して居た部分のみに限られるものであつて、從つて手、前膊及び膝うら等に多く見られ、例へば手首に於て拇指と示指の間の割目から斜に、外上方に延び前膊から肘關節の部分迄ザイルの巾で火傷を來す樣なものである。之の火傷は常にラセン狀を爲すのが特長と云はれ、之の火傷に依てのザイルの使ひ方の如何なる方法によつたかさへ明に分ると云はれて居る。此の火傷は可なり重傷のもので深く皮質まで冒し癒りにくゝ、一度癒つても彼に斑痕を殘してその部分が收縮してしまふものである。

二、アイスピツケル及びスタイグアイゼンによるもの、即ち一寸したハズミから、之等のものに強くふれて負傷するとか或は氷上を一歩々々ステップを切り乍ら登る時、何かの拍子に辷つて轉倒しピツケルの歯の上にたほれてその尖の爲めに腹を破つたり、又轉ばなくても、一寸したハズミでピツケルの方向がくるつて、足先を貫たりすの事がある。やはり之等も不注意から來る事が多いと云はれて居る。

C. 周圍の大氣の作用による負傷

大體大氣の作用としては光線の作用、及び雷によるものとが考へられる。

一、紫外線による外傷　高山等に於ては空氣が清い爲めに塵などなく從つてそうした不純物の爲めに吸收さるゝ事もなく、而も雪、氷、及びグレッチャーに反射して來る爲め、その體に及ぼす作用も亦常に平地に於けるよりは遙に強く殊に着物等を着けざる顔、頸、前腕等に強く働くものである。

即ち俗に云ふ日燒と稱する種類のもので、初め皮膚は充血し赤色を帶び輕度の皮膚腫脹を見る。此の時分はまだあまり氣が付かず見逃す事が多い。之がひどくなつて來ると、紅斑やら浮腫やら、水疱さへ出來て來る。もつとひどくなると皮膚炎を引起す。此處に注意す可き事は一寸素人目には斯うした光線の作用は、太陽の赫々と輝く天氣の時のみに働くものゝ樣に考へられるけれど、其他どんよりした霧の深い天氣の時でも却つて作用の強い場合が多い事である。

二、赤外線の作用　よく雪の中を長く旅行するとか、雪中登山するとか云ふ場合には、時々「雪眼」と云ふやつにやられる人が多い。一寸考へるとこれはやはり紫外線の作用による樣に考へられるが、實は紫外線よりは赤外線の方の作用が非常に大きなものと云はれて居る。之の光線の爲めにやられる眼症で極表層のものは、割合輕度で、症狀としては燒ける樣な痛さ、何か目の中に異物が入つた樣な感とか、涙が盛に出るし羞明と云つてまぶしい爲め光線を非常に嫌ふ樣になる之が尙ひどく、深く進むと結膜を冒し、遂には網膜を冒すに到り、遂には潰瘍さへ作る事があると云ふ。

三、雷擊による負傷　之は全くの天災であると云はねばならぬ。之による負傷の特長は皮膚に印せらるゝ雷擊の跡が面白いと云はれて居る。之の雷擊の爲めの死因は、主に心臟及び神經中樞部の痲卑に歸因する。之の雷擊の爲めに不幸に遭遇すると云ふ事は、他の原因で不幸に遭遇せる場合に比し、殆ど考ふる必要もない程少いものではあらうけれども、兎に

角高山を目ざす人は斯うした事も考へておく必要があると思ふ。而しその豫防として、雷の良導體を外に出して以つて歩かぬ事、例へばアイスピッケル等でも皮のサックをかけて持つとか、或は鐵線や電線、鎖連等の近くになるべく近よらず近よる時は氣を付けて行くとか、又は山岳の頂上のスピッツェは鞍部よりは帶電力大なる事等に注意する事を忘れてはならぬと思ふのである。（續）

漂泊心

僅か一千米突を多く出でない此の近くの山陵の殘雪に、サンマー・スキーを用ひ得る最後の日曜なのである。しかし辛じて澤を埋め、尾根の片側にあやしく續くくすんだ殘雪さへも、私達に快いひと時を與へてくれるに充分役立つた。そうして傾いた日差が、長いシルエットを綠の芝草の上にゆるやかに落す頃、この山里のさゝやかな牧場での新鮮なミルクに喉を潤してから、漸くひらけ來つた流れを狹んで散在する一つの部落からさとぼろへと通じる小さな峠へ私達はさしかゝつたのであつた。

今はもはや早春ではない。いちげ、たんぽゝ、ねんどさくらの可憐なる花々は麗しく咲き亂れ、新綠に潤ほみ香ふた細路を登つてゆくと、どこからともなく汗がにじんで來る。私は二三の良き友の机上を飾らうと思つて、それらの花の一束を手折つた。いま私の心を支配するものは、かの憂鬱性でも感傷でもなかつた。またかつて、かゝる丘陵の草原に俯仰して感じた郷愁（ノスタルジヤー）でもなかつた。しかしこのゆるやかな上りの細道がいつまでも果しなく續いてゐてくれることを希ふ心は一体どこからくるのであるか。それはとりもなほさず、私のうちにわだかまる漂泊性を墓ふこゝろに外ならないのだ。漂泊を懷しむこゝろは、ずつと古くからある人々の心から心へと傳つた一つの小さな流れである。それは激しく心をゆすぶつて喜びや悲しみの外へ向つての強い現れを示す力を持たない。しかしそれは穩やかなる春の夜に響く横笛の妙音である。また靜かなる秋の夜に閃々として去來する一條の古風なる弦（いと）の調である。この幽かなる調を好むものは小暗き山路、果しなき野末、あるひは人けなき森林の世界を彷徨ふのだ。また青白き月光とともに澤から澤へと定めなき旅を漂泊ふのである。旅人はよくこの心を知る。西行や芭蕉や、かれらはまことに永遠の旅人であつたが故に、よくこの心を歌つてゐる。

五月の鳳凰山地藏岳

（參照　陸地測量二十万分ノ一　甲府
　同　五万分ノ一　韮崎）

大正十四年五月十—十二日

額田　敏

大菩薩峠の新緑と鳳凰山の雪とが自分の心を誘惑して、そして出發間際までごちらともきまり兼ねて居たのであつたが遂に雪が勝ちとなつた。

十日　午前四時五十二分中央線日野春驛に下車すると他にも三人連の山に行く人達が長いピッケルを光らしつゝ重いネイルドされた靴をはいて同じ道を行く。駒に行くのだ相である。臺ケ原まで共に語りつゝ行き自分は臺ケ原、佐藤倉吉の家に行く爲めに途中で三人と分れた。朝の空はずつと高く、雲はあれど駒も鳳凰山も雪の山頂がよく見えてその姿が大變に心を振はす。倉さんが山行きの準備をして居る間に自分は朝飯を食ひ荷物の整理をして七時にこの家を出發した。

鳳凰山に登るには勿論韮崎か火山に下車するはずであつたが、自分の心中に於ける二つの爭ひがあつた爲めに倉さんに前以て確かな通知を爲す時間がなくいきなりやつて來たのであつた爲めに重い荷を二つも負つてはる〻〳〵臺ケ原までも上つて行かなければならなかつたのであつた。入戸野に出た時は既に九時であつた。穴山から直接に入戸野に出るとすれば三十分もあれば充分である。茲で三時間半も損したわけであつた。こゝから右に山道に掛つて荒倉山を右に見つゝ其の山腹を少し右に廻つて小武川に下る。地圖の「武」の字の附近で川を渡り大体、川に沿うて1185の頭に出て、そこから青木鑛泉をめがけて眞直に川原に下り午後一時鑛泉に着いた。今の青木鑛泉は地圖の青木湯より約一里川下で燕頭山の東の山麓。小武川の緣に一軒家の記しのある所らしい。御所山と燕頭山との間、小武川の此のあたりは梢廣い草つ原をなして居て人里を距れた一つの天地である。周圍の山腹に澤山生えて居る白樺の若葉が大へん清鮮な新緑に萠え、その中にすーと立つて幹が蔓の樣に白く並んで居る。春の風がひとしきり吹くと流れの音が遠く

又近く聞えて若葉が風に靡くと葉裏の銀色が光り山櫻の花がチラ〳〵散る。こゝが1100位で、地藏小舍が2400だから1300の登りである。宿の人に聞くとほかに或る考へのある事でもあろうが夏登山に五時間を要すると云ふし、日の内には難かしいと云ふ。上での雪の狀態及小舍の雪がどうなつて居るか知れないからまだ大變に時刻は早いがこゝに一晩泊ることにした。荷物を椽側に置いて少し澤を登つて見樣と倉さんと二人で出かけると約二十分位で水源灌用、砂防工事々務所に來た。何だかいやな臭氣が邊りに滿ちて居る爲めに足早にこゝを過ぎ、上ると工事場に來た。地圖の崩壞の下に當つて居る。鑛泉はこゝの岩間から湧出る褐色の水を竹樋で導ひて來て居る。つまらないから宿に歸つてシュラーフザックの中にモグリ込んでトロ〳〵と幻の境に入りかけた所へお客樣の聲がして起きて見ると日本山岳會員岩井三郎氏であつた。明日自分と同じ樣に山に行かれる事を聞き種々山の雪の狀態等に就き憶測した。夕食後宿の臺所に入り込んで主人をつかまへて山の事を聞かんものと行つて見るとおかみさんが一人で岩井さんと自分との話を引受けて知つたらしく喋り立てる。登山した人々から送られた自慢の寫眞等出して見せられて居ると雨が降り初めたと云ふ。氣のめ入ること甚しい。尤も東京を出る時には天氣豫報は「小雨」であつた。少し位の雨はちやんと覺悟のはずだ。

十一日の朝三時半岩井さんに起されて晴れて居ると云はれ心も急に晴々しくなり跳起きて見ると如何にも星は曙の空に大變に輝いて居る。明るくなつて見ると前の御所山の頂附近からずつと右の方へ鍼葉樹林は白く昨夜の雨は上は雪となつて居た。午前四時五十分宿を出發してドンドコ澤に出ると鳳凰山の頂きは早や日に照らされて赫く光つて居る。人郷にも今日は皆めでたき日を壽ぐこゝであらう。吾々も亦山の中で自然の幸多き事を祝福爲さないわけには行かぬ。御代萬歲である。昨日來た工事場を右に見て夏の山道を登ると精進の瀧がよく見える。時々葉に留つた雪が頸筋に入つてひやりとする。地圖にある白糸瀧の其の下に又瀧の記しがある。之れが精進瀧と云ふと敎へられこゝまでやつて來た時、六時二十分であつた。登るにつれて下へも雪が出初めた（1800邊りより）昨夜の新雪は葉に留つて居る位だが下に敷く殘雪となつて居る雪が大變に軟かくて一歩毎に足を突込む。而し處ろ〳〵殘雪の絕えた所へ雪の下から流れた水は堅い氷りとなつて足場を切る手にビーンと來る。登るに從つてその軟かい雪が段々深くなりたまに、モグラない所があると思つて雪上を歩ゆんで行くとボカリと股まで足を突込み背中の荷の重みで上体が前にのめる。雪の表面は少し硬くて其下が大變水氣を含んだ豆腐の樣な

雪だから足が濡れる。倉さんが雪の下に埋まつて居る倒れた裸木に足を滑らして倒れた拍子にその側にあつた枯木の株で胸を打ち一寸ウナツタが暫らくして元氣付いたので安心した。

山の見通しさえ付くならば夏の登山道のみに執着して登る必要はないが、吾々は少し夏道より外れて近道を取らんとして、倒木や、木の根の爲に苦しめられて極少しの距離を登るのに一時間も損をしたので、又々夏の道の標しを傳ふことにした。岩井さんは美津濃のアツシュ製の立派な輪標を着けて平氣で先きに行つて居たが小舍が見えたと叫んだ。吾々も急に元氣が付いて澤を轉ぶ樣にして小屋の前に下つた。（午前十時二十分）2400のコンターラインが澤を切る邊り少し土地の緩傾斜の所にこの地藏小舍が去年十月に新築されたと聞いた。栂の丸太を積み重ねて壁とした四間に五間位の小舍である。先づ窓から内に飛び込んで見ると出來てあまり使用した者の無い爲めかいやな落書なども見當らず木の香がプンとして氣持がよいが、壁の丸太の積方が大變に亂暴で重ね目からは自由に風が出入して荒しの目などにこゝに泊り合せた人々は嘸ぞ寒い事であろう。又天井兼屋根板はその繼目から雪が溶けてポタリ〳〵と漏つて居る。床の下には一面に氷が張つて居る。今は暖かになつたから何れ周圍の雪溶けの水が入り込んで凍つたのであろう。吾々は中に荷物を窓から運んで置いて入口の雪を鋸で切り割り小舍の中に殘つて居た板で雪を掻のけて半分計り戸が開く樣にした。雪を鋸で切り取ることは關温泉で笹川速雄さんから聞いた爲めに大變に役に立つた。そして邊りの倒れた木を運んで置いて後極身輕に、ザイルとアイゼンとピツケルの外に少しの食量と防寒具を持つて登つて行つた。（午前十一時五十分）荷を持たない身体も矢張りよくモグリつゝ賽の河原の下鍼葉樹林がつきて樺や偃松の疎生する邊りから雪は急に硬くなつて來た。そこでアイゼンを着けて頂上へと急角度で登り、地藏岳頂上の岩の途中、絶頂より約三十尺位の所へ午後一時三十分着、そこでアンザイレンして最後のチムニーをアイゼンの爪ミ膝と背とで身体を支へつゝ登り初めたが、此のチムニーの横斷面は

狀をなして淺い爲めに背中が外へと滑り外れる樣になり且つ上になると段々狹くなつて居るので途中で登り難くくなつた爲めと時間が餘り長くこゝにのみ止ることを許さない爲めに絶頂を直ぐ上に見乍ら下りて賽の河原まで來た。これから觀音の頂上までは往復二時間を要するとすればそれから小舍まで降つて薪木の用意や何かをすると大分遲くなる。その爲めに殘念乍らこゝから降ることにして賽の河原の雪のない砂の上に身体を横たへた。登りにも雪こそモグツて時間は大分要したがあまり緊張する

地藏岳ヨリ南アルプス連峰ヲ望ム

額田　敏

程の所もなかつたし、又思ふ通りの山々の山頂へも立つことが出來なかつたにしても岩壁にかぢり付いて眺めた駒から仙丈、白根の眺望が出來るだけでもあまり不足は云はれない。今自分の周圍には雪こそまだあるけれども、こうやつて砂の上で暖かい日に照らされて居ると此の山頂へも既に春は來て居る自然の力は爭れぬものである。あゝ山頂の幸。

岩井さんは何か先つきから邊りを物色して居たが小さい石像を一つ持つて來てリュッサックの中へ入れて居る。そしてこれを拜借して歸つて今度は二つにしてお返し申すのだと云つて居る。自分も亦其の心になり同樣一個拜借して歸ることにしてスエーターに包んでリュックの中に入れた午後二時二十分この山を下り初めてもとの通つた跡を降り小舍へ三時二十分着。雪溶の水の漏ることをなくする爲め屋根の雪下しが初まつた。ザイルで身を縛りその端を傍の立木に結んで屋根に上りピッケルと板で雪を搔き卸す。其の間倉さんは枯木を切り倒しては小舍へ運ぶ。外の作業も終つた後小舍の土間の氷の上に太い丸太を七八本並べて其上で焚火を初めた。例の石の地藏尊がちやんと棚に祭られて蠟燭の御燈明が暮れかゝる小舍内に輝いて居る。風雨氷雪に大分御佛体は傷んで居らせられる樣に拜するが明日からは久し振りで下界の風に御當りになるのである。而して人の世の放埒を御見せ申すのは惡い事かも知れん。

日が暮れて食事も終つた後は夫々山の思出てを語る。岩井さんは秩父の山を盛んに語り、倉さんは白根、赤石の事を云ふ。焚火が盛んになると各々自然に後方にさがつて火を遠巻きにして汗を拭いて居る。眼が過る。去年の秋駒では七丈小舍で振ふて一夜過した。大變な違いである。豐富な薪木の有難さである。その下は氷に塞された床の上でもこの樣に汗を出す程暖いとは有難い事である。何時とはなしに眠つて居た自分はゴーと風が木に鳴つた音に目が覺めるとパラ〳〵と顏に雪がふりかゝる。丸太の隙間からだ。外に出ると月の明りで割合に明るい。そして綿を千切つて飛ばす樣に雲が飛んで其の間から星が光る。たとえ今少し雪が降つて居るとも明日は大丈夫晴れだ。又小舍内に入り暖かい眠りに陷つた。

暖かい山の夜は大變早く過ぎて午前三時に再び眠りから覺めた。二人はまだ眠つて居るらしい。靜かに用意して置いた飯盒を二つ火に掛けて置くと自然に飯は煮えて吳れる其内に二人も起きて飯を食ひ荷物の整理も濟みこの小舍を五時二十五分出發。外は尙少しの雪はチラ〳〵降つて居るが晴れる天氣だ。心配はない。雪は凍つて居るけれども相變らずモグル。而し登る時とはまるで樂だ。それに昨日の足跡がちやんとあるのだから。今日は少し荷が重く足の關

節が少々疲れる樣である。白糸瀧の落口の岩で荷を下ろして瀧を見物し青木鑛泉に八時五十分に降つた。

暖かい日の光りがこの谷一ぱいに滿ちて若葉の香がプンと鼻に來る。風が白樺の若葉を搖いで吾々の額の汗を撫でて吳れる。今日も亦幸多い日である。客の居ない宿の人達は椽側に出て如何にも暇そうに日なたぼつこをして居て、吾々の降りて來たのを待つ樣にして迎へて吳れた。一時間こゝで休み、今度は鳥居峠を越して韮崎に出ることにした途中釜無川に架す小さい橋は悉く流れ失せて居て仕方がないから若尾新田まで下つて韮崎に出た。停車場に二時十五分着。

雪に就いて

天候、氣溫、山の位置及季節等によりて各々山の雪質の異ることは明かな事である。駒より鳳凰山と打續くこの山座、そこは北海道、東北地方や北アルプス地方などに比較すると緯度もずつと南になるから高さの割合に雪は早く溶け、又平地に近い爲めにその氣溫の影響を受くることが多い。而し五月の山の雪と云へばたまには新しく降ることはあつても硬いしまつた雪を想像する。その想像、それは自分が未だ雪に對しての無智を證明して吳れた。輪樏の用意を怠つた爲めに大變に登りに骨が折れた。岩井氏は美津濃製の輪樏（或は雪靴の方が正しいかも知れぬ）を持つてその爲めに樂々と雪上を濶歩して吾々二人はうまく押へられた譯であつた。

雪のあつた1800－2700の間に於ても鍼葉樹林中たまに散在する濶葉林下とか澤とかの如く比較的空がすいて居て日光の直射されることの多い部分は雪質は比較的硬くして足が沒する樣な事はなかつたのであるが、一度鍼葉樹林下に來ると殆んど一歩毎に服までもモグリ込んで大變に歩むのに苦しんだ。ピッケルの柄で處々雪中にボ！リングをやつて見ると雪質が大体その最上層が十日夜の新雪、其下が一寸乃至二寸位稍硬き水分多き雪、其下層が非常に多量に水分を含んだ豆腐の樣な雪、この雪が大部分で最下層が雨と水と土とが凍つたコンクリートである。

吾々が登る前日即ち五月八日は一帶に雨で釜無川は大變な出水で各所の橋を流した、里の人の話しにも駒や鳳凰の雪が此の雨で大分解けて山肌が表はれたと云つて居た。實際登つて見ても地藏小舍の前の澤には土砂が一ぱい押出して泥水を押し流した跡が明であるし、又賽の河原の直ぐ下も砂が雪の上まで押し流されて居て其時の流れた水が少なからざりし事を思はせる。此の雨の爲めに雪が多量に水分を含み、そして濶葉樹林下又は澤の部分は開けた上部の空間の爲めに晝夜の氣溫の變化が割合に速に雪に影響し表面に硬きクラストを作り足のメリ込みを防ぐのであるが、鍼

葉樹林下の雪はその上部の鍼葉の爲めに雪の上部は掩はれた事になり氣温の昇降も雪にまで大した變化を及ぼさないで其後大變な氣温の降下がなき限りは割合に長くそのまゝの狀態を保つ爲めに今度遇つた樣な雪質があり得るのではないかと考へた。而し自分は今迄に雪質に就て論ずる程雪に親しむ機會はないものである。然るに前の樣なドグマチックな事を喋つて物笑ひの種になると思ひます。雪質に就て研究深き人々が此の事實の正しき解釋を下して頂く事を待つて居ります。

五月九日午後十時　飯田町驛發

十日午前五時　日野春驛着

午前六時　臺ヶ原着、午前七時臺ヶ原發、九時入戸野、午後一時青木鑛泉(一泊)

十一日午前四時五十分青木鑛泉發、六時二十五分精進瀧、午前十時二十分地藏小舍着、十一時五十分小舍發、午後一時二十分地藏岳頂上、一時四十分頂上發、賽ノ河原にて休憩し午後二時三十分賽ノ河原發、午後三時二十分小舍着(一泊)

十二日午前五時二十分地藏小舍發、八時五十分青木鑛泉着、午前九時五十分青木鑛泉發、十時二十分鳥居峠頂上、午前十一時二十分折居、午後二時十五分韮崎停車場着、午後三時四十五分韮崎發汽車にて歸京。

宿泊所として青木鑛泉の外に山中、雨を防ぎ得る岩石の下に三人位は結構露營出來る岩屋が地藏小舍迄に三ヶ所と小舍の上に一ヶ所ある。此の最上部の岩小屋は雪に半ば埋まつて居たが、あとの三つは露營出來る。

ロッキー行

今夏槇有恒氏始め岡部、波多野、橋本、三田、早川の諸氏はカナデイアン・ロッキー山のジヤスパーパーク方面に赴かるゝため、一行は六月十九日横濱發パリ丸に乘船出發せられたり。世界的この壯擧に赴かるゝ諸君の健康を祈ると共に目出度く成功せられんことを希ふ次第なり。

スキーの思ひ出

（越後赤倉と獨逸ライプルゲ）

大野精七

在京當時（大正十年秋まで）の日曜日は同志と共に、習志野や士官學校へ行つて馬に乘るのが、日頃多忙な自分に取つては何よりの樂みであつた。此れより先き二年前から永年の慣例なる夏の水泳を全く止めて、夏期は毎朝、青山原頭陸軍大學馬術教官の指揮の下に乘馬練習と鞍更へしたのであつた。

大正九年秋、自分が北大醫學部員候補者と決定した時は駿馬の產地と聞く北海道の札幌であるから定めし乘馬の機會が多い事であらうと自分も喜び、人からも喜ばれた。そして二十年以上も住みなれた東京を去る可く決心したのであつた。然し冬の北海道では乘馬は不可能である。幸ひ札幌は氷雪のスポルト即ちスケートやスキーが盛んであると聞く。自分は先づスキーは何んなものであるかやつて見たくなつた。其後大正十年三月末、春休みを利用して越後赤倉温泉に在つた東大スキー部を訪問した。當時の東大スキー部長は河本禎助君、スキーの先生は高橋、阿部の兩氏、尙同好者林春雄、鹿子木員信、小島三郎の諸氏が居られた村井玄齋氏令孃が雪上紅一點の美彩をはなたれたのも當時である。滯在五日間の內、一日はスキー大會あり、一高、松木、高田の諸高等學校、諸中學校、各地方青年團等參加された。總て滑走競技のみであつた。他の四日間を練習して見た。練習所は温泉の裏にある御宮の岡であつて、雪にうづもれた鳥居の天上はスキーマンの上衣掛けと變つて居るその高臺から滑つては登り、滑つては登り、人のする如く自分もして見た。レルヒ少佐直傳の兩スキー先生は、高臺に立つて居られて、時々テレーマルクや、クリスチャニアの模範を示された。ジャンプは未だやつて居らぬ。東京では有名である太田山も來て見て、其の意外に低いのに驚い

た。最後の日は關温泉の見ゆる小山まで一里餘の遠征を試みた。歸路は夕暮の寒氣で氷雪と變じ制動術を知らぬ初學者の悲しさ、直滑降をして無茶に轉倒する事無數、途中東京より持參せる大枚四圓を奮發した着色眼鏡を失ひ、本陣に歸へつて尙ほ顏面數ヶ所に小出血あるを注意された。田口驛への歸路半里ばかりを河本スキー部長に送られ、其の日の夜行で歸京した。

此れ海（水泳）より陸（乘馬）を經て山（スキー）に登つた余の經過であつて、余をスキーに導いた河本先輩に對しては常に感謝して居る次第である。

大正十年十一月渡歐、冬期伯林に居つたが附近にはスキー地が無い。十一年五月獨乙南方バーデン州フライブルグ大學に轉學致し昨秋來朝された病理學の泰斗アショフ先生の教室にはいつた。バーデン州は舊聯邦國の一つであつて西はラインを隔てて、アルサス、ローレエン（戰後佛領）に、南は瑞西國、東はウツテンベルグ州、北はネツカ河を以て他聯邦國と境し、細長い國であつて、國の大半部は從に走るシユワルツ、ワルドの連山が占めて居る。其の中にフエルドベルグ（一五〇〇米）ベルヘン（一四一四米）カンデル（一二四一米）、シヤウインスランド（一二八六米）等の諸山が屹立して夏期は徒步、冬期はスキー登降の好適所である。シユワルツ、ワルド（Schwarz wald黑森）は樅（タンネ）の殖林に於て世界的有名である。其の葉は黑綠色を呈するを以て此の名ありと云ふ。其の麓にハイデルベルグ及びフライブルグの大學がある。フライブルグは獨乙第一のスキー場フエルドベルグを近郊に持つて居る。人口十万餘カトリツク敎の盛んな、且つ極めて靜かな學校町であつて地勢の關係から云つて我が札幌とよく似て居る。大學は西曆一四五七年の創立で、Albert-Ludwig-universität と云ひアショフ敎授を始め有名な學者が多數居る。冬期群集して來る學生中には、スキーを目的として來る者も多い樣である。我が日本に於ける大學制度は、彼れの如く自由轉學を許さない。若し之を吾に許したならば差し當り我が北大の如きはスキーマンたる學生の收容に苦しむ事であらう。

當時アショフの敎室に居つた同僚神谷甫彦、大野省三（南滿醫學堂敎授）の兩者は先冬既に敎回スキーを試みて居つた。然し滿洲大野は其の後盲腸炎手術後スキーを止めねばならなかつたのは誠に氣の毒であつた。やがて大正十一年十二月が來てスキー。ツアイトとなつた。男も女もスキー裝が急に增加して見える。獨乙に於けるスキーを思ふ時忘るる事の出來ないのはスキーの恩人スチーニング氏である。氏は、フライブルグ市の一寫眞屋の主人であつて同胞の寫眞器を買ひ、燒付けを依賴するもの多きを以て日本人を大得意として居る。スチーニングは非常な好スキー家で

あつて、神谷、滿洲大野君等は同氏からスキーを敎はつたのである。今度も神谷君と共にスチーニングに案内されて或る土曜日午後登山する事を約束した。スキーは滿洲大野より頂戴し、スキー靴、スキー外套、ゲートル、リツクサツク等一切を整へ、其の日の午後電車の終點ギンテスタール停留所で會合した。獨乙の汽車ではスキーを持つたまゝ平氣で客車に乘れる。フライブルグの電車は運轉臺にスキーを置きスキーの爲め一人分だけ餘計支拂ふ事になつて居る。ギンテスタールはフライブルグ市郊外の小村である。キーブルグと云ふ料理屋があつて同胞の歡迎或は送別なぎに杯を擧げてシユワルツ、ワルドの氣分を味ふ處である。此の日も電車の終點で澤山のスキーマンが連れを待ち合して居る。男も女も、老ひたるも若きも、スキーに行く學生達は山の百姓家に泊る者が多い。自分等（スチーニング、神谷、大野）は今夜シヤウインスランドの一部なるハルデ（一一四七米）に泊る豫定である。此處では他のスキー場に見る如く馬車に乘つて行く者は一人もない。自分等は各々リツクサツクを脊負ひ、スキーを肩に擔つて一時間里程の谷間をだんだら登りにフリードリヒスホーフまで歩かねばならぬ。もう其の頃は多少汗ばんで來る。此處からは全く登り山である。シユワルツ、ワルドは到る處に夏期自動車の通ずる立派な道路が、山上まで蜿々として出來て居る山の要所には別莊式な料理兼ホテルが散在して居る。此の正道を登つては道は遠過ぎ、旅舘に行かない前に日が暮れる恐れがある。自分等は此處から近路である樅（タンネ）の林の中の小路を登つて行くのである。雪が多い時は此處からスキーをはいてツイック、ツアツクを切つて登り得るのたが、當時は雪が少ないのでスキーを擔つて登らねばならなかつた。汗はだくだく、肩は痛くなつて來る。其の後千葉醫大、石橋敎授が訪問され、スキーに案内して泣かした難處である自分は夏期盛んに山登りをして居るので比較的丈夫であつた。時々正道に出ては復た小路を登る。スチーニング氏はスキーを重ね其の先端の穴に紐を通してタスキにかけて雪上を引き上げる事を敎へてくれた。此の樅（タンネ）の小路はスキー道をなして居るので可なり堅まつて居る。注意すれば靴でも登れる。途中スキーをつけたが赤倉に於ける四日間の稽古が大變に役立つ。ホルツシラーグ（九〇〇米）からは可なり急に樅（タンネ）の間を登るのである。此の邊から上は何時來ても雪が宜い。東京や赤倉邊の雪のみを知つて北海道の雪を知らざりし自分には粉雪の理想的なるに一驚した。日光の當る時、ウルトラビオレットの空間に樅が林立し、自分も繪の中の人ではないかと思はるる事がある。ギンテスタールから約三時間を經れば樅の林をぬけ出てヨゼフイン。ルーエ（一一五〇米）と云ふ峯に達する。此處から左方に近

くシャウ、インスランド（一二八六米）の頂が見え、前方遠くフエルド、ベルグ（一四九五米）及び其の頂上に在るビスマルク塔とフユッテミが並んで見える。ハルデへは此處から約三十分間、峯つたいに滑らねばならぬ。シュワルツ、ワルドの何處へ行つても道標が完全に立てられ距離まで擧げてある。又途中の處々に略章がはりつけてある。例へばハルデへはギンテスタールから赤十字のマークつたひに登つて行けば自然に行ける樣になつて居る。ヨゼフィン、ルーエからハルデまでは既に樅林がない。見渡す處スキー練習に適する所ばかりだ。吹雪の際道を失はざる爲め此處から約一町を隔てて棒が立てゝある。日の暮るる前、ハルデの宿屋（gasthaus zur Halde）に着いた。此の旅館は人里遠き山上のホテルで百人位泊れる。舊式の室屋（シュワルツ、ワルド式）に新に新式な新館を建て增して居る。長距離接續の電話があり、ホテル自力の電燈が設備されて居る。主人ウィースラー氏はスキーの大家で、世界大戰の際は令弟と共にスキー隊長として活動した。寫眞家スチーニングは既にウィースラー氏と懇意の仲であつて僕達をウィースラー夫婦や兩親に紹介した。五六十人の泊り客があつたが外國人としては僕達の外に和蘭人や伊太利人も居つた。客は轉地かたがた家族連れで來て居るものと僕達の如く日曜を當てに滑りに行く者との二種であるが後者が最も多い。舊館はスキー置場、バー、食堂、其の他家人の居間等に使用して居た。新館は三階建で專ら客室で舊新兩館を接續する處も尙一ケ處のスキー置場が造られてある。僕等二人は二階の或部屋を得た。室内にはベット二個（如何なる山奥の旅館でも復た農家でも團團は綿を用ひず皆羽毛を入れて居る）洗面机一箇、箪笥一箇、ストーブ一箇（薪炭用）椅子數箇あり、窓外にははるかにスロープを隔てゝ樅林が雪に包まれて居る。やがてスキー服のまゝではあるが少しく整へて食堂に出た。此の食堂は天井が少しく低く周圍の壁には繪や寫眞がかけてある。僕等はスチーニングと共にストーブの一角、ピアノに近き所に陣取つた晝なれば窓外を見晴しが出來る所である。フライブルグ地方ではワインが產出する。多くの獨乙人は個人、或は團體に半リットル又は一リットルと注文して居る。少しく濁つた新酒は安いので一番よく賣れる。各テーブルで日（雪）燒けした男女が盛んにメートルを擧げ始めた。直ぐ傍の机に居る額に瘤を持つた一學生は聲色を使つて話家を始めた。向ふの青年達はスキー歌を合唱してシー、ハイルを連呼して居る。兎に角働く可き時は能く働き遊ぶ可き時は出來る丈けよく遊ぶと云ふ獨乙邊の慣習は我々の學ぶ可き事であらう。食事がすめば殆ど必ず音樂が始まる。歐羅巴では男女共に音樂を理解せざるもの無く又ダンスを知らざるもの

もない。直ちにテーブルが片づけられ老幼男女スキー裝、スキー靴をはいたまゝシー、ワルツを踊つて愉快をつくすのは殆んどプログラムと云つて好い位である。（獨乙では Ski をシーと云つて居る）或はシー、ハモニカ（手風琴）を引いて男女踊りまわり、最後には奇聲を發して男子は女子を天井高く差し上げるなど、仲々振つて來る。かくして彼等は毎夜十二時過ぎまで樂み、翌朝は平氣で滑り出すのである。朝の起床は通常八時で八時半から九時までには雪上に飛び出すのが普通である。日本に於ける如く男子のみの會合であれば朝早く自分の思ふ樣に出られるが、西洋では女連れが多いから凡そきまつて居る樣である。戸外に出づれば到る處緩急思ふ儘のスロープがある。宿から約十町隔ててハルデン・ケプレ（一二六七米）がある。此處から宿への直滑降は傾斜中等度にして一同の愉快がる處である。數人の定まつた學生は毎土曜日必ず登山して希望あれば適當の處でスキーの講習をしてくれる。僕達は連れのスチーニングからステンボーゲン、テレマルク、クリスチアニアなどを敎示された。雪上會ふ人は互にシー、ハイル（Ski heil 日本の失敬に相當す）を呼び合ふのが禮儀となつて居る。尙丁寧を要する場合は擧手の禮をする。群集するスキー場ではシー、ハイルも儉約せらるるが、山上などで稀に合ふスキーマンは未知の人でも、又外國人であつてもシー、ハイルを呼び合つて居る。或る時樅の林間を滑降しつつある一美人にシー、ハイルを云つて見た。處が其の婦人の曰く日本でもスキーを滑るかと。僕は十五年前からやつて居ると答へたら、其では獨乙と餘り差はないと驚いて居た。日本のスキー場では婦人を見る事が甚だ稀であるが、西洋では男六分、女四分位のスキーマンを見る。然し女子が單獨で滑つて居る事は無く、女の居る所必ず男がついて居る。五十顏をした男や女も相當澤山見らるゝが、日本では未だ其處までには時がかからう。此の日は晝食後少しく練習をして午後二時過ぎスチーニングの案内で歸路についた。未だ林間を滑る技術を知らなかつた自分等は成る可くスキー道を滑降し途中雪のなくなる所からスキーを擔いでギンテスタールの電車終點に下つた。此の愉快なスキーを味つた僕等は必ず毎土曜日曜をかけて、ハルデへ登山する事とした。

始めてスキーを練習した時

志賀　亮

運動好きの僕の事であるから運動の中でも最も男性味のあるスキーを是非習つて見たいとの願望は隨分古い過古から持つて居たのであつたのであつたが遂に其の機會がなかつたのである。

大正八年頃物故した實弟が米澤の高工に居てスキーを始めて得意になつて居た時分や又は僕が名古屋に在職して居た頃同僚諸氏が伊吹や赤倉に練習に行く樣に成つた時などの好機會が澤山あつたのだが毎回色々と他の用事に碍けられて練習に行く事が出來なかつたのだ。

大正十一年に獨乙に留學しウルツブルヒに滯在して居たその冬に本場のスキーを修業したと思つてベルリンの同志とスキーに行く事を約束などしたがどれも約束流れになつて實行されず、餘り殘念だつたので二三の獨乙人と共にミユンヘンの傍のガルミツシユ、パルテンキルヘに見物に行つたのだが、同行の獨乙人共は口先丈けスキーマンで、とても實際にスキーは出來ないので、僕一人で始める程の大膽さも無かつたので殘念に思ひながら其の冬はそのまゝ止めてしまつた。

十二年の秋にフライブルグに移つて此處に大野、木下の諸君と一所に成つてその冬からいよいよスキーを始める樣になつてはじめて多年の希望が滿たされた。

將來運動好きの僕だから運動と名の付くものは大部分手を出して見たがその内で冬の運動に就ては余り經驗がないことにスキーについては全く無學だつたから以前から新聞記事や運動寫眞などを視たり、又獨逸でスキーシーズンになると方々で開映される種々のウインテルスポルトの活動寫眞などは出來るだけ見逃さぬ樣にして、スキーに對する憧憬を深くしその眞髓を理解し得る樣に努力して見たり、

フライブルグに居ては木下君はじめ周圍の人々から、スキーの話を聞いたり、スキーシーズンが近づいて來て種々とスキーの身仕度も整つてからはもう一通りスキーと云ふものを合點した樣な氣分に成り、內心すくなからず得意で居たが、今から考へて見れば實に滑稽で且つ皮相な觀察だつた然しこれはあながち僕許りではなく、誰でもスキーを始める以前一度は体驗する實感だらうと思ふ。

スキーを始めて穿いた時の感想――と云つてもその時と場所などの影響で種々彩色されるのであらう。フライブルグ在住の連中でもその前年の冬は大野君を始めその他の諸君の熱心ぶりは素張らしいもので、毎土曜日にはスキーを肩にしシャウインスランドの高原まで徒歩で出かけた相だが、一年後の冬には大野君は僕と入れ違ひにフ市を去り他の人にも勉學の多忙の爲にスキーに對する熱心さも漸らぎスキーシーズンが來ても大した興奮もなかつた。だから一年前に此處でスキーを始めた同僚諸君の感得した感想と僕等の夫れとは多少の相異がある事は勿論だと思ふ。

ある日曜日木下君を先生として僕と他に初心者二名とで早朝から最初のスキー練習に出かける筈だつた處、他の連中が朝寢をした爲十時頃やつと勢揃が出來て、木下君の自働車で出かけた。自働車等でスキーに出かける事が既に不自然でスキー新興味を半分に減してしまつた上、自働車ではとてもシャウエンスランドまでは行かれぬので、シュワルツワルドの入口でフ市から四五十キロあるヒンテルツアルテンへ行つた。此處は初心者の行くスキーオルトで小規模ではあるが、よく設備も整つて居てホテルやレストランがあるし、スロープも丁度琴似のスロープ位ある。其日は極めて雪質の惡るい日であつた。驛の前のホテルに自働車をあづけ、其處の玄關から直ぐスキーを穿くのだ。スキーを穿く操作は前以て木下君から傳授されて室內で充分練習して置いたが、さて雪の上で實行するときは甚だしい苦痛と困難を感じた。ことに僕は胴長で足が短く且つ太皷腹な爲なほ更不自由なのだ。

夫れでも他の初心者より早く穿けたので非常に得意なものだつたが、夫れからスロープ迄歩行する時――練習し始めてから滑走するのか雪の中に埋まるのか區別の付き兼ねる程無數に轉覆する時――雪の中から再び起き上る時――の努力と困難とは全然前から想像した外のものであつた。然し一二時間練習してゐる間に稍々數尺滑り得るやうになつた時の愉快さと歡喜とはまれに多大の困難と努力が叶はつてゐる丈けにとても名狀し難い神秘的な味のもので、それは今日まで僕が他の種々の運動の練習中には、決して体驗し得なかつた所のものだつたので、はゝ此處がスキーの面白い處だなと直ぐ感ぜられた。も一つはスキーを練習す

るの場面の絶氣に依る偉大なライツを認めねばならぬ。自然の積雪の中に全身の努力を以て練習する時の運動精神は勇大な、シュネーウンドウィルトシャフトに、ライツエンされて益々敬虔的なものに美化される事は、とても他のスポーツには見出されず、只スキーのみにある丈けだと感じたのだ。夫れで日本へ歸朝して、雪の北海道に赴任した曉には、あの蔭欝な長期間の積雪の冬を征服し得る計りでなく若々しい學生諸君に伍して是れ等若人達の感化に依つて、稍々ともすると、一年寄ぎみになる自分の精神及肉体の中に潑溂とした英氣を撫育するには、どうしてもこのスキーをやらねばならぬと云ふ感念が――今までは空論的だつたのが、スキー練習を始めた其日から實證的な確實性のものと成つたのである。この所信は其後になつても增々明瞭になるのみである。

最初の練習で味を占めてから其後ほとんど毎日曜に其處に練習に出かけた。同志が少かつたので大抵は自分一人の時の方が多かつた。朝八時半に臨時列車が出るのだが天氣の良い日曜等にはプラットフォーム一杯の乘客で、時ならぬスキーの林が出來る位である。往復共板敷の腰かけの三等列車に乘込んで、夕方の汽車でフ市に歸つたのである。

ヒンテルツアルテンのレストラン等でも度々行く僕の顏を覺えて變手古な格構をした外國人の僕に對しても、一同すこぶる相想よく歡對してくれて、忽ちの中にスタムガストに成つた。又平常は頑固な獨逸人連でも、スキー場ではいづれも晴々と氣輕な氣分で僕等に對しても氣持よく「シー・ハイル！」と挨拶した。そんな工合でたつた一人で行つた時でもスキーを練習して居る間は、外國人殊に日本人に對して無味意な反感を持つて居る獨逸人達も混つて居るのだと云ふ嫌惡な感情が微塵程も念頭に浮はなかつ事はスポルトの賜であつたのだ。

一体「シー・ハイル！」と云ふ言葉は單に「今日は」と云ふだけの意味ではなく、スキーなどで途中行違つた時は勿論、練習中お互に衝突した時、陳謝の意味にも用ゐるし又は他人が下手をやつて轉倒したのを見た時の輕い素見の意味でも「シー・ハイル！」とやる。この言葉が如何にも無邪氣に且親密に聞えるのだ。この事は是非共我々日本のスキー界にも輸入應用し度いと思ふのである。

も一つ羨望に堪えなかつた事は、歐洲の婦女子が盛んにスキーをやる事である。澤山の妙齡な婦人連がスキー服に身を堅めてルツクサツクを脊負ひスキーを肩にして男子に負けずにスキーに出かける樣子は如何にも雄々しいものである。日本の婦人連の中でも此頃は大分スキーが流行して來た樣であるが、未だ〳〵極めて幼稚らしく思はれる。願はくば此の我國婦人スキーが近い將來に於て歐洲のそれに比して遜色ない位に旺盛にならん事を。

「山とスキー」五週年記念號發刊に際して

感想

加納一郎

この小さな雜誌が、五十號を出すまでになつたことは、私としてこれ以上悅ばしいことはない。それとともに、このさゝやかなる生長のために、直接間接に御好意を與へられたところの既知、未知の諸先輩、讀者諸兄に感謝せずに居られない。

今では此の雜誌の一つの調子となつてしまつてゐるが、いつもくつろいだ記事に乏しい傾向があつた。それでいま五十號記念を出すにあたつて、少しばかり感想のかたちでいまゝでの事を書き記して置きたいと思ふ。

池に石をなげたのは板橋君と私とであつた。全く偶然に氣分があつた。それで北大スキー部と北大豫科旅行部との機關雜誌として月二回宛の簡單な雜誌を出さうとふ云ことを仲間に提議した。仲間達はそれに贊成して呉れたばかりでなく、同じ印刷するなら廣く同好者に分つ樣にしたらどうかと云ふことになつた。そうしてだんだん波は廣まつていつた。

雜誌の名前をどうするかと云ふことは皆が大分考へあぐんだことだつた。思案投類のところへ來られた並河教授が山とスキーのことを書くのなら「山とスキー」とすればどうだいと云ふ風に簡明直載に解決してくれられたので、直ちに會の名まで少し呼びにくいとは思つたが、それにして

しまつた。

そのころ仲間達の住んでゐたのは悪い名前だが「貧民窟」と呼ばれてゐるところであつた。そこの四疊半が編輯室であつた。創刊號の發送のときには板倉君が遠いところをやつて來て、不器用な手つきで、宛名を書いたり、切手をはつたりすることを手傳つてくれた。部數はその時から五百部時に一百内外の移動はあつたが、今日に到るも依然として五百部である。

板倉君は此の雜誌の仕事に就ては大變熱心であつた。たのめばよく原稿を書いて呉れた。東京へ行つてからも、これだけは續けて行く樣にと繰返してくれた。

好んで山へ行くものが山のことや自分達の旅行のことに就て筆をとることさへ、何だか矛盾がある樣に考へられるに、加へてあんなに世間ばなれのした、俗事を避けたがる板倉君が、校正だ、發送だ、雜誌代だと云ふ樣な面倒な事にまで協力して、雜誌の存續を計つたのは一寸不思議である。

本誌に載つた限りに於て彼の原稿は、日頃彼の口をついて出るウィットと同樣、極めてすらすらと書きあげられてあつた。それでゐてあのすばらしい文章であつたのだ。

號を重ねるに從つて漸次にその存在を認められて來た。筆を持つことを知らなかつた仲間達が、むつかしいことを書く樣になつた。終には著作を世に問ふ程の人も出來た。危ぶまれた經濟もどうにか片がついて行つた。それと共に雜誌を發行することの外に種々の仕事が行はれた。講演會や活動寫眞の公開等が。そしてそれから收益は全て北大スキー部のシャンツェ建設の爲にあてられた。

初め豫科の旅行部と北大スキー部との機關雜誌であつたが、旅行部に先輩が出來て、北大スキー部との圓滿な理解がなかつたゝめに、後には北大スキー部だけの機關雜誌となつてしまつた。

たとへ一部山を主とする人々が加はつてゐても勿論、題名の通り、山とスキーとの記事を同樣に載せる力はなかつた。「山とスキー」とは云ふものゝスキーの記事を主として、山の記事は洵に情けないものであつた。わずかに慶應の大島君がいつも光彩ある玉稿を發表してくれた外は、スキーの記事にしても、或る程度以上の詳論は、文字に說明することの全く困難且つ無用のことであるが爲に、種がつき相になつた。それと云つてあまり低度のものも、載せられない樣な破目になつてしまつた。

私が最も殘念に思ふことは、誤植の多いことゝ毎號一つとして氣に入つた寫眞版が出來なかつたことである。銅版印刷には相當の苦心はしたつもりであつたが、何分印刷技術の方は何とも仕方がない。その上東京方面から寄送せられるものを除いては殆んどよい原版が得れなかつたことである。表紙やカットも二三、宮城孝治君が作つてくれだほか、皆外國の書籍から失敬してゐたことをも附加へたい。

考てへ見るとよくこんな不完全なものが、命をつないで來たものである。しかし、一號一號その存在が認められるとともに、またその編輯、發行には未熟ながらに相等の意氣込を持つてゐた。月刊とは云へ惰力的な編輯は一度もなかつたつもりである。創刊當時の熱意は續けられた。

私も漸く今度で此の雜誌の編輯と全く無關係になる。從つて會の仕事にも亦。終りに今迄一緒に仕事をした人々、特に宮城君、長谷川君、赤松君等が大學に於ける實驗や研究の多忙なるにもかゝはらず、此の雜誌のために多くの時間を費されたことは同人の深く感謝するところである。

（六月十日）

感想

中野誠一

山とスキーの四年間の感想を書けつて？　冗談ぢやない今更僕なんかに感想もないぢやないか？　然し思ひ出せば早いものだね、大正十年の五月から早や四年余の日がたつてしまつた。當時の事は殆んど覺えて居ないが、僕には確に「山とスキー」は三號雜誌か多くとも十號雜誌で終る位に考へて居たらしい。だから何でも京都の友人達には兎に角半年分の誌代だけは俺に寄附する心計で出せ、三ケ月で終るかも知れないがその邊は今から保證出來ない等と云つやつたものさ。

處が驚いた事には一年續いた、そして又驚いた事には二

年續いた。更に驚く可き事は此から第五年目に入り更に一段の活躍をやらうとする事だ、幹事の任に當つた奴や又此から當らうと云ふ連中には相等迷惑な次第だらうがまあ此も因果とあきらめて貰ふより仕方がない。何分雜誌の發行だから印刷屋本屋等と云ふ手合との交渉が多い。結局金もうけの連中に金もうけない連中が仕事を託すんだから、そこには可成り不愉快な思ひもあつたらしい。又今後もあるに決つて居る。實際當事者の苦心や努力は全くお禮の云ひ樣がないとでも云つて挨拶するところだらうて、然し僕なんかその局に直接あたらない連中は岡目八目と云ふ利器で盛んに無理な註文をしたり、ムカツパラを立てたりしたものだ。此樣な機會でもなければ此んな事も挨拶する時が無いだらう。

四年間には同人は可成り變化があつたね、雜誌の命名親の並河さんは札幌から洋行して京大の教授になられた。板倉と藤江とは惜くも逝つた。平井は東大に入つてスキーの本を書いたらしい。岡見の清公は此の誰かの所謂「とこはるの國」札幌の巨大なエルムとやらわかいローンとを後足で砂にして東大の方へ脫走した。その他人事には種々とあるが思ひ出せない。

仕事は種々と數が增えて來た。槇さんに講演をお願ひしたのを初めとして、矢張槇さんのお世話で佐藤氏と細川侯のスキーのフイルムを拜借して公開した。僕に一番印象の深いものと云へば此のフイルムの公開だつたらう。そして今でもマザマザと記憶に殘つて居るのは興行師の體が懸引細胞からなつて居ると言ふ事とズルイ奴が勝を占めると云ふ實社會の眞相だつた。それでも、札幌第一の大小屋たる錦座の舞臺に立つてお叩頭してから顏を上げたら、文字通りに立錐の余地が無い迄人がつまつて居つたんで僕は俟がつまつてしまつた程嬉しかつたものだ。槇さんの講演會や活動寫眞の公開で、北大スキー部は兎に角、日本一のシプルングスヒューゲルたるジルバーシャンツェの建設をなし得たものだ。此れも感謝に言葉が無い程である。

唯時々困つたのは、北大スキー部と山とスキーの會の關係だつた。山とスキーの會は北大スキー部關係者が雜誌の發行を中心に集つたもので、山とスキーの會が北大スキー部の中心では無く、北大スキー部の別名が山とスキー會と云ふのでも無い。北大スキー部はどこ迄も北大を中心にして存立し、山とスキーの會は雜誌山とスキーを中心に存立して居る。處が山とスキーの會と北大スキー部とを全く同一視して居る人が出來たり、山とスキーの幹事の意志が直接北大スキー部の意志の樣に思ふ人があつたりした。此は僕自身でも、ウツカリそんな氣持になる事がある位だから第三者には仕方がないかも知れない。その點は今迄の幹事

は隨分氣をつけて居たが猶且つ然りである。今後も意を充分にせないと愛讀者が勘違ひをせられたり、會が迷惑したり、北大スキー部が困つたりする事になる。

まあ此邊で打切る事にしやうか。何を書いたんだか、一向に不得要領である。

第一年刊行當時の事ども

長谷川　敦

五月の初旬といへば東京附近では既に晩春、氣の早い都會人士は麥稈帽を冠るであらうが北の國の北海道では楡の嫩葉が僅かに綻びる頃である。山とスキーの會の事務所が現在の所へ移轉したのは二年前のその頃、雜誌の方でいへば第二年が終了して第三年を續刊しやうといふ時二十七號刊行の頃であつた。赤松と私とが會に關係を持つてゐたのはそれ以後一年間の事である。その當時の思出を辿る時は尙半年許り前に溯り大正十一年の秋、會の事務所と大學スキー部の中心が山本といふ下宿屋にあつた時代から書かねばならない。その當時山とスキーの會それ自身にとつても又我々のグループにとつても大きな力だつた中野、加納の二君は既に卒業期であり、松川、本田はスキー部の事務に追はれ、廣田は現役ジャムパーとして且スキーの幹事として孜々としてジャムプの研究に餘念がなかつた。一方會の事務萬端は卒業期の多忙にも拘はらず加納君一人の手になつたものだ。當時山本には松川、加納、廣田の三人が部屋を並べて下宿してゐたから宛然此處がスキー部、山とスキーの事務所の觀があり、事實上策源地であつた。恰度この時この下宿屋の一室が空いた事は私一身にとつては可なり大きな迷惑であつた。即半ばペテンに懸つた事を知り乍らこのグループに投じ餘義なく會の事務を手傳ふ事になつたのだから。私が山本に移つた時は晩秋のうすら寒い日の續く然し朗かな、內地では一寸味はう事の出來ない時候であつた。槇さん板さんが見えて錢函の村上の親爺の所へ一升

壜をぶら下げて行つて、半日野葡萄を採つたり蒼空を眺めたのもその頃だつたと思ふ。

燕のやうに槇さんが南へ去つて冬は段々迫つて來た。この年會の仕事として雜誌以外の事ではあるがスキーシーズンの始まる前にスキー術階梯の出版を是非實現させなければならなかつた。經驗のない私は執筆者への督促印刷會社への交渉などに摩胡つき通しに摩胡ついて漸く出來上つたものは文體の不統一、夥しい誤植、甚しきは事實と全く反對の意味の個所などのある不體裁極まるものであつた。執筆者が手を分けた事がこの失態の一原因ではあつたとはいへ校正にあたつた私の責任であつた事はいふまでもない。思出す毎に冷汗が出る。

序にこのスキーシーズンの事も一寸書加へて置かう。十二年の暮から十三年へのシーズンはスキー界では二つの大きなカテゴリーが提示された時だ。即グレンデスキーとアルペンスキーとの分野が劃然と現はれて來たのだ。尤もこの二つのカテゴリーは今に始つた事ではないが大學スキー部の固定シャンツエの第一期工事の完成、全日本スキー選手權大會などが具體的にそれを示すやうになつた。確に本邦スキー界に一時代を劃した時であつた。なほこの年私達のグループの大きな打擊は板倉君の死であつた。同時に中野、加納の二君の卒業といふ事も少からぬ損失であつた。春が甦つて雜誌の第二年は終つた時雜誌の第三年を續刊するか否かの大きな問題にぶつつかつた。この時幸にも中野加納の二君は卒業後も札幌に在住する事に定り、赤松といふ適任者を得た事、會員の熱心な協力が第三年を續ける事の十分な可能性たらしめた。そこで現在の北六條西六丁目に一戸を構へ面目を一新して刊行を續ける事とはなつたのである。然し決して面目は一新しなかつた。事實を告白すれば當時私には雜誌の刊行については何の定見もなかつたのだ。折角二年間繼いたものを中止するには忍びない位の考へしかなかつたのだ。つまり積極的には何等の考へもなかつたのだ。然し幸だつた事は讀者の數の大體一定してゐた事、印刷會社との交渉の比較的容易だつた事、原稿に餘り不自由しなかつた事（これは二三の會員が特に努力して吳れた賜である）よき相談相手のあつた事の爲に經營にはさまで困難は來さなかつた。唯發行期日の遲延の爲に警察遞信局などから小叱をいはれた事は再三でなかつたが、兎に角第一年、第二年の方針をそのまゝ繼承し、いはゞ惰性で進んだのである。故に一面より見れば沈滯しきつてゐたともいへやう。この時代の會として比較的華々しく活動したのは例のフィルム「スキーの驚異第一編」の北海道に於ける公開であつた。これまで北海道に於けるスキーは學生と一部の人士にのみ限られたスポートであつたがこの年の

北海道のスキーの一般化は著しいものであつた。少くも札幌、小樽に於けるそれは素晴らしいものであつた。かゝる機運はこの年既に熟しきつてゐたのは事實であるがそれを助長せしむるにこのフィルムが如何に効果があつた事か。この年である下駄屋、自轉車屋がスキーを店頭に並べるやうになつたのは。又北海道山岳會がシャンツエの築造をなし一般のジャンパーの練習に供したのは。量に於て著しく增加したシーロイファーの數は質に於ても素晴しく向上した。ジャムプの隆盛をこのシーズンに見るであらうと豫期したのは前シーズンの事であつた。それでその好指針たるべくその道の造詣の深い廣田（友人を讃める事は變なものだが事實だから仕方がない）の研究を纏めて一書を出すべく氏に强請した。「スキージャムピング」がそれである。斷つて置くが私達の出版は儲けやうといふのではない。マイナスにならない程度で廣く同好の士に讀んで貰つてスキーのよりよき理解と發達に資せんといふのである。

會ではフィルムの公開、雜誌以外の刊行物の爲に對外的には交渉は多くなつて來た。遂には私達の手では解決の出來ない複雜な問題にまで遭遇するやうな事もあつた。又心と心との間に僅の隙のある事もあつた。然し同じ一つの目的の爲に働く心と心とは互に勵まし互に助けあつた事が可なり大きな力であつた事は思ふだに嬉しい。兎に角第三年を終へる事が出來た。當時會で共に住んで生活したもの、途中から出たもの、入つて來たもの、泥棒に見舞れた話、隣家の火事に脅かされた話、事私事に渡る思出はいくらもあるが第三者には興味のない迷惑なものであるから割愛する事にする。

四年目のこゝろぐも

君　一　生

第四年目のこと。葉眞面目に書いたらよいのか、好い可減に書いたらよいのか、兎に角何でもよいから書きさへすればよいのか、私には見當が少々つき兼ねる。

何故と云ふに此年のことを書く筈になつて居た小川君が

友人のよんどころない發病の看護に附き切りで筆をとる暇がないので、僕が潜越乍ら代つて書くことになつたからである。斯ういふと人の責任を負はせられて不服でも云ふて居るやうに聞えるが、決してそんな變てこな意味は毛程も含んで居らない。要するに小川君が忙しいから實際云ふと勝手に私が筆をとつたやうな譯なのである。

餘り四角張つたことを云ふのも嫌氣がするからザックバランに一寸四年目に起つた、そして私の頭にある些かの事どもについて書いて見たいと思ふ。

三年目の仕事を一段落つけて、四年目に入るに當つて會の常務者となつたのが加納一郎、小川玄一、佐々木政吉、伊藤秀五郎の諸君と僕とであつた。

毎年の事乍ら發行人だとか印刷人だとか編輯人だとかゞ變る度に警察への屆出でをなす。それが新聞紙法に關係のある雜誌發行人の義務である。

その屆に「一、題號山とスキー」なんて書く時は實際商賣人になつた樣な氣がして嫌氣がさす。學生の時にこんなことを感ずるのも、好い感じのしないことの一つであるとさへ思はれる。然し自分の好きなことの爲にはそんなことは忍ばねばならない。僅かな好い感じのしないことの後に言ひ表はせない程大へんな愉快が待つて居るからである。

會の人達はこれ位の考へは皆んなが持合せて居る筈であるお互がこの氣持でさへ居たら、何時までも決してこの會は潰れることはなからう。所でこの屆出でのことで懷ひ出しても痛快なことが四年目の始めにあつた。

屆出でに行つたSが警察から歸つて來て喜ぶの喜ばないのつて、警察で起つた一件を語り出す。是はまあ私達がこんな若い時の思ひ出での一つになることであらうと思はれる。話と云ふのは、立法的に云つて終へば少しも可笑しいことでもなければ、皆で騒ぐ程のことでもないのである。兎に角話は、「今度編輯人と云ふ役目を引受けることに決つたH君は、明治卅八年生れで、未だ十三年には徴兵前なのである。で警察では「新聞紙法規によつて此人は未だ徴兵前で責任能力がないからいけない」と云ふてアッサリ蹴つたのであつた。止むを得ず編輯人といふ形式的の名前だけはSが代つて肩書にすることになつた。一體物の境を明白につけることはどんなことでも六ヶ敷いものであるが、責任能力と云ふ抽象的の言葉の解釋を人間に適用するに徴兵檢査を以てする法文と云ふものもなか〳〵味なところがあるものである。

それからH君はどう〳〵小供扱ひにされざるを得なくなつた。口の惡い連中の間で餘り氣の毒で同情して居た者もあつた。たしかに僕なんか其一人だつたと思ふ。

この年の三月末であつた。所謂新文明と流行の中心である賑かと云ふより朝から晩まで、目まぐるわしい喧噪を續けて居る東京と云ふところから、遙かスキーの都に僕達のスキーの殿樣がお出でになつた。そして札幌近郊から青山温泉の方へ仲間の連中がお供をした。三月末には稀に見る粉雪ですつかりお氣に入つたらしい。そのお供の御ホウビと云ふては甚だ非禮の到りであるが、兎に角槇さんを介して私達は殿樣御所藏のドイツのスキーのフィルムを拜借して十一月末から札幌、小樽を振出しに全道の各所で公開さして頂いた。何と云ふても札幌での公開が華であつた。二日間滿員續きで大成功裡に終つた。北海道のスキー界、日本のスキー界がこの映畫に如何に刺戟されたかは、第三回の全日本スキー選手權大會の成績や、各地のスキー場に於けるスキーランナァの服裝でも判る。模倣ばかりの輕薄さに耽れずに、獨創の豊富な「質」で行つて欲しいと何處のスキー地へ行つても僕には考へられた。

今年から例の山とスキーの會の研究會を復興した。一週間一回毎水曜日に集つて、その水曜會の爲の幹事から（時には自發的にも選ばせたが）適當の問題を選んで代る代る研究解說をすることにした。やはり考へて見るとなか〳〵問題はつきるものではなかつた。解說をして呉れた皆さんに敬意を表す。

もう一つこの年に始めてやつたことがある。それは山とスキーの會の爲に適當に各地方に、會員の親しい方々に依頼して會への通信をして頂いたことである。成果は決して少くはなかつた。一々御禮する筈であるがつい時期を失して終ひましたから此處で改めて敬意を表します。

最後に全日本スキー聯盟と云ふことゝは關係はありませんが、私達の會で現在日本にある各地のスキー團體の一覽を作る爲に各地の方に團體に關する種々なる問合せに對し一々御返書を頂きまして、これを總括し得たことに對し、亦深く皆樣に御禮申して置きます。

四季を通じて山とスキーの事を考へて居る内に又一年が過ぎて終つて第五年目の歩みに入ることになつた。四年目のことについて書くことには未だ不足は充分ある。だけどそれは徒らに頁を費すに過ぎぬから止すことにする。代筆の爲に生じた不足の分、不滿足の點は許して頂きたい。

眞面目にそして皆が眞劍である間は會は續くであらう。然し「隋勢」と云ふ言葉が入つて來たらもう終りだ。

現在及び將來のことども

廣田戸七郎

會の前身と、そしてその過去のことについては已に前述の樣なものであります。

私供の會の現在、それは御存じの通り昨年と同じ場所に住居して、全國に多くの讀者を有して事業を滯りなく進めて居ります。この會の現在の會員と云ふのが五二名でありまして別記の如くであります。そして常務者が五名であります。會の趣旨が趣旨なもんですから、よく各地方の讀者の方々から會員になり度いがとの申込を受けますが遺憾乍らそれをお斷りして居ります。實際は私供の樣な學生の仕事でなければ會員をうんと各地に募集して、皆な雜誌を購讀して下さる方は名實共に會員にしたいのですが、さう致しますにはいろんなことが手傳つて來て、吾々學生のするには餘りに繁雜な不行屆なものになる傾があるのであります。で實際各地方の方々でこの雜誌を讀んで居らるゝ方の中には會員にして貰ひ度いと希望して居らるゝ向もありませふが、その點は惡しからす御了承下されて、そして別に形式的の會員と云ふ樣な名義はないが、精神的の會員に成つて下さつて、今迄通り否夫れ以上に將來益々吾々の爲に又本邦山岳界やスキー界の爲に御骨折り下さらんことを希ひます。

去る四月廿九日に私供の會の總會を開きまして、會の將來のことにつきまして相談しましたところ、もう如何にしても吾々のこの會と、そして雜誌發行の事業を廢止することが出來ず、とう〳〵又事業を繼續することゝなりました

會の將來、それは考へて見れば見る程なか〳〵責任が重大の樣に思はれます。

各地にある山の會やスキーの團體、それに各々が持つ機關的の雜誌の樣なものも少くないやうです。さうしたものには皆夫々の特色があるやうです。又さうかと思ふと大日本山岳會や、全日本スキー聯盟の樣な、全國的のものもあ

現在及び將來のことども

廣田戸七郎

會の前身と、そしてその過去のことについては已に前述の樣なものであります。

私供の會の現在、それは御存じの通り昨年と同じ場所に住居して、全國に多くの讀者を有して事業を滯りなく進めて居ります。この會の現在の會員と云ふのが五二名でありまして別記の如くであります。そして常務者が五名であります。會の趣旨が趣旨なもんですから、よく各地方の讀者の方々から會員になり度いがとの申込を受けますが遺憾乍らそれをお斷りして居ります。實際は私供の樣な學生の仕事でなければ會員をうんと各地に募集して、皆な雜誌を購讀して下さる方は名實共に會員にしたいのですが、さう致しますにはいろんなことが手傳つて來て、吾々學生のするには餘りに繁雜な不行屆なものになる傾があるのであります。で實際各地方の方々でこの雜誌を讀んで居らるゝ方の中には會員にして貰ひ度いと希望して居らるゝ向もありませふが、その點は惡しからす御了承下されて、そして別に形式的の會員と云ふ樣な名義はないが、精神的の會員に成つて下さつて、今迄通り否夫れ以上に將來益々吾々の爲に又本邦山岳界やスキー界の爲に御骨折り下さらんことを希ひます。

去る四月廿九日に私供の會の總會を開きまして、會の將來のことにつきまして相談しましたところ、もう如何にしても吾々のこの會と、そして雜誌發行の事業を廢止することが出來ず、とう〳〵又事業を繼續することゝなりました

會の將來、それは考へて見れば見る程なか〳〵責任が重大の樣に思はれます。

各地にある山の會やスキーの團體、それに各々が持つ機關的の雜誌の樣なものも少くないやうです。さうしたものには皆夫々の特色があるやうです。又さうかと思ふと大日本山岳會や、全日本スキー聯盟の樣な、全國的のものもあ

りまして、それがまた機關雜誌や、年報等を發行して廣く全日本から寄稿を募ると云ふ樣なものもあります。

所で私供の會がまたその小結節的團體と大結節的團體との間に伍して仕事をして行かうと云ふのですからなか〳〵容易ではありません。然し私供各小結節的團體が夫々個有の特質を有して居る如く、私供の會も亦、會の生れた時から有する特質を失ふことなく、亦全日本的に會員を有する大結節的團體の趣旨や業務等に牴觸せぬ範圍で益々內國的にも國際的にも從來の基礎を一層培ふて堅實なものにして行き度いと思ひます。

何しろ學生の爲す事業と云ふ爲に、不備な點もあれば又欠陷も少くないと思ひます。然し私供はこんな事を實行するところには、可成りの決心と責任と趣味とを持合せて居る積りであります。私供は私供の致らぬところを遠慮なく御指示を仰ぎ斯道の爲にモットーとして進んで行き度いと思ひます故何卒宜しく御後援を得たいと思ひます。

尙々本會を有効に利用せられ、又機關雜誌の爲に山岳旅行についての寄書や希望やらを御送り下ることを喜んで受納致します。

私供は北海道と云ふ土地で仕事をして居るものです。私達は昔の所謂本土に於て感じた樣な北の端の土地と云ふ樣な感じを一掃して、東京で關西を隣りの樣に考へて居る如く、東京の隣りの北海道と云ふ氣持を持ちたいと思ひます。そして又この雜誌を讀んで下さる皆さんからもさう考へて頂きたいと思ひます。私供は本當に東京の隣りに居るんです。そして可及的北の端で出る雜誌とか、田舍雜誌と云つた樣な氣分を微塵も混じへて行きたくない積りです。そして又實際從來まで所謂日本的の山とスキー雜誌として或一種の云ふべからざる特徵を有して來て居りました。そして少くとも相當に日本的に認めて頂きました。それも要するに會の爲、雜誌の爲に獻身的に盡力して下さつた先輩の方々の賜物であると信じます。實際今迄の會の雜誌を見てそして玉稿を送つて下さつた方々、即ち吾々の會の爲めに多くの力となつて下さつた先輩の皆樣に本當に感謝する次第であります。

實際寄稿して下さつた皆樣は、自分の會の雜誌の樣な氣持で會の雜誌の爲に骨を折つて下さいました。

私達はこの會の續いて行く限り、小にしては微力乍ら本邦山岳及びスキー界の爲に、大にしては國際的に仕事を續けて行き度いと思ひます。

現在私達の會と外國のスキークラブと交渉のあるものはノールウエースキークラブ、スウエデン、ポーランド、イギリス、スウイス、チエツコスロバツク、オーストリー等のスキークラブでありまして、大抵彼ちらの年刊と會の雜

誌を交換して居ります。

私供の會は別に之から新事業的な大計畫を立てゝは居りません。たゞ最も公平な立場から本邦山岳界並びにスキー界の指標となつて、その研究、發達を促進し且つ偏せぬ程度に於て所謂專門的雜誌としての使命を全ふしたいと思ひます。

第十三シーズンを送る

廣田戸七郎

先シーズン假りにそれを大正十三年度の冬と云ふ意味から第十三シーズンと呼んで筆を起します。

降雪が少いと各地のスキーランナアが、合宿が出來ないで困るとか、スキー競技會が擧行されぬとか、冬山の登攀が出來ないとかと云つて隨分愚痴を洩らすことをよく私供は聞く、いや實際私供もこんなことを氣づかつたこともあつた。夫れに未だ記憶新な大正十二年度の冬のシーズンであつた。ほんとの一例ではあるが流石雪の名所高田では二月の中旬に全日本スキー選手權大會を開催せらるゝに當つて飛んでも無い破目に陷込まれたやうであつた。尤も大會が出來なかつた譯ではなかつたから結構であつたと思ふ。所で夫れとよく似た話が今年のシーズン即ち十三シーズンにノールウエー、スウエデン地方にあつた相で、シーズン中に來たアチラのレポートに今年は一月末まで薩張り降雪がなくて、多くの北歐の選手連は二月中旬のノールウエースキークラブ主催のインターナショナルスキー大會に參加する爲めのレギュラーなトレーニングが出來なくて困つた相であつた。そして何でも一月末になつてさへ雨が降つて

まるで"Regen Winter"と云つた方が適當な位だつたと云ふことである。祟られたる冬は世界のスキー地を堂々廻りに見舞つて居るらしい。

さて翻つて我が國に於ける第十三シーズンはどうであつたかと考へて、さて一シーズンの始めから終りまでのことを纏めて見樣とするとなか〳〵纏め盡されない。何んな人でも統計じみたものを作出したり、何か一つまとまつた事を仕樣とする時には可及的完全を期して事をするであらう殊にお役所邊りの統計でも年中やつて居る人は完全を期して居ることであらう。然し吾々には完全に物を作成すると云ふやうなことは出來るものではないと思ふ。私達はたゞ缺點の無い樣に、缺陷の少いやうに仕事を纏めて行くまでぢやないかとも思ふ。

私はさうゆう意味で成るべく多方面に渉つてこの一シーズン中のことを綜合して見樣と思つたが、なか〳〵旨く行き相にも無い。兎に角外部に發表されてゐるものを蒐集したに過ぎないので、發表されずに居たりするいろ〳〵なことには無論觸れては居りません。そして又私は十三シーズンと云つても別に六ケ敷い一つの冬のシーズンの定義に欽めて考へても居らぬ積りであります。

先づこの十三シーズンの事を私はこんな工合に考へて纏めることにしました。

一、冬季スキー登山
一、スキー競技會
一、其他のことども

冬期スキー登山

この事に關する論議的の方面は先づ控へて、如何に冬期登山中にもスキーを利用しての冬期登山が近年に盛んになつて來たかは、今更私が此處で喋々するまでもございません。

先づ冬の魁として私共の目に入つたのは十二月初旬の東朝紙上に出た日本アルプスの冬の景を讃へたる「冬嶺禮讃」がある。やがて來る冬への計畫は、東部並びに各地スキー團體から發表された。而して曾て早大山岳部の人達によつて歩をきざまれた日本アルプス乘鞍岳の初登山は、松本高等學校山岳部の百瀬氏外三名の人達によつて一月廿六日目出度く成功されたる發表があつた。蓋し是は中部地方に於ける本年の冬期スキー部登山の記錄であつたであらう。

本州地方に於ける冬季登山は、むしろ大正十二年度、十一年度の決行されたるものに比し十三シーズンには減つたやうに考へられる。

我田引水では無いが實際輕裝にしかも經濟的打擊もなく

最も有効に冬の日曜日をスキー登山に費すことの出來る所は北海道であらう。そしてまた北海道殊に小樽、札幌、昆布附近の山岳は、標高こそ一〇〇〇米内外のものではあるが、緯度の高い爲めに本州邊では二〇〇〇米位の高山に登つた位の冬の景情に接することが出來るのである。何時も山に行く者の心に云ひ知れぬ快味を與へ疲勞を慰してくるゝ山頂邊りに咲誇る霧氷の美しさ、さては長稜に載せ懸るさながら萬里の城の長さに比肩するやうな雪庇の壯觀なる景趣や、濃綠の針葉樹林にその枝もたわわに盛りかゝる白雪の美觀、夫等の豐かなる自然の情趣を心ゆくばかり味ふことの出來るスキーランナアは數多く北海道に住んで居るやうに思ふ。否北海道に住んで居る人ではない北海道のスキーランナアには、さういう惠れた自然に遊ぶ樂しみや、愉快さをたくさん持合せて居る。

實際冬の眞中の土曜、日曜などには本土邊のスキー地で到底味へぬスキー登山がいくつも決行されて居る。夫れ故特別の大計畫の登山の外、大して注目されて登山の記事などは餘り新聞などに見られぬ。それはスキー登山が一般に普及されて居る爲めに、餘り貧弱な、否普通によく登る樣な山の登山などのことを下手に發表すると一笑に附さるゝことが多いからである。

第十三シーズン中に於て北海道に特記すべき事は三月廿四日から約十日間北大スキー部員によつて決行せられた北海道中央高地に聳え立つ黑岳行である。此處は嘗て冬期に登行されたる記錄はあるが、其當時は登山小屋の設備も不充分で且つ登頂にはスタイグアイゼンを使用せる樣に記錄されて居るが、此度の行では頂上までスキーを使用して全くスタイグアイゼンや、ピッケルの使用はなかつたやうである。而して登山小屋中の滯在も割合に長かつたので、非常な成功で歸つて來た。其他二月中に矢張り北大スキー部員の數名は芦別岳、夕張岳、富良野岳方面のスキー登山に成功して居る。尙今シーズンに一寸世間の注目をひいたのは阿寒岳登山である。これは網走スキークラブ員が最初に八合目程まで登行して下山、其次に小樽高商スキー部員によつて登頂されたやうである。

兎に角北海道の冬の山は割合に是迄に登られて居る樣であるが、本州では立山連峰が非常に各方面から注目されて居る割合に中部地方の日本アルプス入りの少いのは、一に時間と經費とに餘裕ある、而して登山に熱心なる「人」に缺くるところがある爲めに原因するのであらうか、又冬期登山を爲す爲に、登山小屋等の設備不充分の爲であらうか。

スキー競技會

逐年隆盛に赴きつゝあつたスキー競技會は十三シーズンに入りて尙一層著しく各地方に於て開催せらるゝやうにな

つた。先づ大體團體的競技會の相當に基礎のあり相に見ゆるものを數へて見ゐならば、第一に大日本體育協會主催の第三回全日本スキー選手權大會、北海道山岳會主催北海道選手權大會、北大スキー部主催全國中等學校スキー競技大會、小樽高商スキー部主催全道實業團スキー競技會、高田スキー團主催全日本女子スキー選手權大會、樺太全島スキー選手權大會、小樽スキークラブ主催第二回全小樽青年、實業團、中等學校、小學校スキー競技大會等がある。

尙この外に各地各地にある大、小スキー團體の競技大會等は實に數へ切れぬほどある。

今スキースポーツとしての眞の價値に關しては論議やずに私が採錄し得た十三シーズン中の競技會に於ける最高のレコードを記して見やう。

クロツスカントリーレース

日/月	主催	名稱	種目	入賞第一位者	レコード
11/1	小樽高商スキー部	札幌中等學校スキー驛傳競走	ディスタンス(30k.m)	小樽商業チーム	3時44分35秒
18/1	北大スキー部	校内スキー大會	同 4キロ	岡村源太郎	25 24 5/10
			同 16キロ	同上	1 24
24/1 25/1	高田スキー團	信越地方スキー選手權大會	同 16キロ	塚越一太	1 37. 20.5
			同 4キロ	藤貝稔	11 50.3
			同 10キロ	石英	1 6 30.5
			同 16キロ リレー	近藤ラッタル	1 14 23
24/1 25/1	北海道山岳會	北海道スキー選手權大會	同 16キロ	岡村源太郎	1 12 46
			同 10キロ	今井源一郎	44 53
			同 4キロ	岡村源太郎	19 33
			同 16キロ リレー	小樽商業チーム	1 9 27
31/1 1/2	青森縣体育協會	東北地方スキー選選大會	同 16キロ	五十嵐三郎	1 36 56
			同 4キロ	野澤精一郎	20 44
			同 10キロ	村田雪	54 15
31/1	北大スキー部	全國中等學校スキー選手權大會	同 16キロ リレー	大港要一郎	1 39 50.6
			10キロ	片桐港部	46 25

2/2	ウインタアスポーツ協會	信越スキー大會	20キロ	中川新學	不明
			10キロリレー	仮山中學	不明
1/2	岩見澤スキー協會	第二回スキー大會	1キロ	眞所五藏	6 10
			4キロ	同上	27 50
3/2	小樽中學スキー部	校内スキー大會	1キロ	奥井	6 40
			4キロ	同上	27 10
5/2	高田中學スキー部	校内スキー大會	10キロ	保坂祐三	1 20
			16キロ	近藤義和	1 31 30
7/2	高田市教育會	市内小學校青年會聯合スキー大會	記錄明瞭ならず故に採錄せず		
5/2	小樽水産學校スキー部	校内スキー大會	8キロ	内山良夫	41 55
7/2	札幌二中スキー部	校内スキー大會	4キロ	大塚	17 26
7/2	小樽北海商業スキー部	校内スキー大會	4キロ	小原	25 50
			10キロ	柏	60 30
7/2	長岡商業スキー部	校内大會	0.5キロ	小宮	4
			2キロ	加藤	14 30
			4キロ	牧野	19 30
			6キロ	佐藤	30 30
11/2	小樽スキークラブ	全小樽スキー大會	9キロ	大橋(實業團部)	1 15 36
			9キロリレー 3人組	三菱銀行チーム	1 10 07
			12キロリレー 4人組	北海商業チーム	1 29 50
			6キロリレー 4人組	緑小學校チーム	50 37
11/2	江別同好スキー倶樂部	第一回江別スキー大會	1キロ	老本	6 16
			4キロ	山田	25 30
			10キロ	老本	57 53
8/2	三菱美唄沼小學校	美唄校小學スキー大會	1キロ	藤堂	11 43
8/2	小千谷スキークラブ	小千谷スキー大會	0.5キロ	石本	不明
			2キロ	小秋元	不明
			6キロリレー	長岡商業チーム	38 27
11/2	福井縣教育會主催	縣下スキー大會	100米.200米.500米.1000米. の種目ありタイムレコード不明につき採錄せず		

14/ 2 15/ 2	大日本体育協會	全日本スキー選手權大會	4キロ 10キロ 16キロ 16キロリレー	高橋昂 松田幸雞 中川新 關東チーム	22 57 1 1 2 33 7 1 39 30 6 1 31 35 2
14/ 2 15/ 2	大山スキークラブ	山陰スキー大會	1キロ(少年部) 同 (青年部) 5キロ(同)	山崎義信 宮本忠傳 同上	3 40 2 53 22
15/ 2	網走スキークラブ	全北見スキー選手權大會	1キロ 4キロ 4キロリレー	青木 渡邊 網走チーム	9 42 27 01 25 21
15/ 2	新庄スキー同好會	新庄スキー大會	100米.500米.1000米.200米.等の種目あれど、タイムレコード無き爲採錄せず		
8/ 3	樺太廳スキークラブ	全島スキー大會	16キロ	吉岡軍吉	1 59
21/ 1	高田スキー團	全日本女子選手權大會	100 m 400 m 800 m	關しげ 大高きぬ 小山内たま	32 3 31 4 03

ジャムプ

日/月	主催	名稱	場所	第一位入賞者	得點	最長不倒距離
24/ 1	北海道山岳會	北海道スキー選手權大會	ジルバアシヤンツエ	緒方直光	17.91	17.7m
25/ 1	同上	同上	アルフアシヤンツエ	末武久	18.63	13.1
1/ 2	北大スキー部	全國中等校スキー選手權大會	ジルバアシヤンツエ	岡田三郎	17.71	16.30(同人)
1/ 2	岩見澤スキー協會	第二回スキー大會		眞所	15.00	12.40
1/ 2	小樽中學スキー部	校内大會		齋藤		13.38
5/ 2	札幌二中スキー部	校内大會		上島	11.94	15.27
8/ 2	東旭川尙武會	第一回少年大會		竹田		4
8/ 2	三菱美唄鑛業所スキー部	美唄炭山小學生スキー大會	番町ケ丘	前田	17.60	

11/ 2	小樽スキークラブ	全小樽スキー選手權大會	線ケ丘	四谷(中等生)、石川(小學生)		20m 20(同人)
11/ 2	江別同好スキークラブ	第一回江別スキー大會		市田		14.25(同人)
15/ 2	網走スキークラブ	北見スキー選手權大會		西村		10.92(同人)
15/ 2	大日本体育協會	全日本スキー選手權大會	大鰐シャンツェ	背山	57	
16/ 2	札幌スキー部	校内スキー大會		前田	18.79	22.10
22/ 2	北大スキー部	小學生スキー大會	ジルバアシャンツェ	村本金彌	17.6	
22/ 2	余市小學校	全夕張スキージャムプ大會		秋野	15.02	28.20(同人)
22/ 2	鹿ノ谷炭礦汽船スキー部			山本		5.
						9.16

大体に於てクロッスカントリー、ジャムプ共逐年そのタイムや、飛躍レコードなどの良好なる成績をあげつゝあることは何人も認めて居るところであらう。然しクロッスカントリーでは國際的の長距離レースに比して見ると、なか〳〵ノールウエー方面の一流選手と伍して行け相にもない例へば世界的スキーランナアであるノールウエーのハウク氏が五〇キロを走る間に日本の選手がその五〇キロ中の四キロだけを走つて漸く續いて行ける程度である。

尚又ジャムプに至つては、ジャムピングヒルの設備不充分の爲と云ふ人もあらうが、僅々本年の最高レコードが二八米、二〇に過ぎぬ位であるから之も亦前途がある譯である。然しやがては、三〇米臺を樂に飛べる時代になるであらう。クロッスカントリーのタイムが早く外國のものに近くなつて行くか、ジャムプのスタイルがもつと良好となり一般的に盛んにジャムプが行はるゝ樣になつてその飛躍レコードが外國のものに早く近ずくであらうか、それは今後大いに興味ある問題であると思ふ。

尚此外に競技會として數へ得るものにスラローム、なども今年は擧行されたるものが數回あるが、元來スラロームはスキー競技としての眞の價値から云ふならば、到底クロッスカントリーや、ジャムプ等と匹敵し得る種目ではなからうと思ふ。これは本當にたゞ餘興的と云ふか、從屬的競技——第二種的競技として價値のあるものかも知れない。實際スラロームと云ふものは、競技的價値は少いものではあるが、スキー術に通達する、スキーの應用を充分にすると云ふ點に於て、如何なるスキーランナアも習得して置い

たらよからうと思ふ。

更にもう一つスキー競技種目として、クロツスカントリーレースとジャムプ競技とのコンビネイションレースと云ふものである。これは未だ我が國では行はれて居らないが周知の如く國際スキー競技では、已に決行されて居るもので、其方法は單簡に云へば、一人のスキーランナアがクロツスカントリー（大約一五キロ以上）レースと、ジャムプ競技に參加して其結果兩競技に於て表はした成績を點數で表はして採點の樣式で、其ランナアの順位を決定する競技である。

これはクロツスカントリーレースと、ジャムプ競技とを平行的に奬勵發達すると云ふ意味に於て價値あるものである。而も競技そのものとしての興味も少くないと思ふ。まづこのコンビネイションレースが行はるゝやうになれば我國のスキー競技も外國の夫れに比して、大へん面白い比較を得らるゝことであらうと思ふ。

（未だスキー競技のことについて書きたいこともあるが、紙數に制限がありますから是で大會のことは止めることにします。）

其他のことゞも

最後にスキー界に起つた所謂歴史的事實となるやうなこと、例へばアツソシエーションの組織や、クラブの成立やスキーの一般的繁榮による地方的の影響や、又は冬季登山中に起れる不祥事や競技會に於ける突發的悲慘事や、或は高貴な方々のスキー御練習や、其他山岳、スキーなどに關係あるクラブなどからの出版物の發刊やら、又は軍事的意義を有する冬期演習やら、と云つた樣な凡べての事柄を網羅して此處に一項を作つた次第で、それも小さいことまで述べて行けば限りがないから、先づ簡單に世の耳目を引くに足る歴史的事實となる樣な事柄を二、三述べて終り度いと思ふ。

私供は十三シーズンに入るに先つて、冬期運動を一把して行かうと云ふ趣旨から出發して、大日本ウィンタアスポーツ協會なるものゝ創立せられたことを第一に忘るゝことは出來ません。然し是は羊頭狗肉による不景氣的の結果になり終へたと聞いて居ります。

更に大正十四年二月十五日青森縣大鰐町に於て、第三回全日本スキー選手權大會の日を期して全國のスキー團體を統一した全日本スキー聯盟の創立を見てことは、本邦スキー界の歴史的價値と云ふ見地からして、又本邦スキー界の地位を國際に確保するに足ると云ふ點から見て、非常に意義あるものであつたと思ふ。

所謂近頃の言葉を借りて言へば、會議當時の模樣は嚴肅なる歴史的情景を呈して居たやうであつた。然し二日に渉

つて熟議したと云ふ事は、たしかに本邦スキー界の各地代表者並びに創立委員となつた人々が眞面目に、この聯盟の前途を考慮せられた結果であらうと思ふ。若しもこの聯盟が瓦解することがあるならば、それは恐らく日本スキー界の永久的のニスバルテであつて、築かれんとする日本スキー界の國際的地位を自ら放棄して、永久に水の涸れた小さな古井戸の中に一つの裂目を作つてその裂目を傳つて堀り切れなくなるまで暗の中に入り込んで行かうとするのであらう。

更に協會とかクラブの組織されたるものには、關東地方から全日本スキー選手權大會に選手を出す爲に組織された關東スキー聯盟があり、縣では獨立した青森縣スキークラブが創設せられ、ずつと以前に組織されたことがあつたのであるが、札幌スキークラブと云ふものが中絶から蘇つて來た樣に新らしい組織で復興し、近頃の日本三景の名所として有名な北海道大沼に大沼スキークラブが生れ、三月初旬室蘭に室蘭スキークラブの創設等が公表されて居た。

シーズン中の不祥事件には北大スキー部の藤江君の十二月末ニセコアンに於ける不祥事、更に二月下旬札幌鐵道局に在勤して居られた高橋氏の毛無山に於ける凍死、大鰐の選手權大會のジャムブ競技中に於ける北大スキー部の緒方君の可成り重い負傷事件等が未だ吾々の頭から去らぬ事どもである。

最後に出版物のことを一寸考へて見ることにしたい。

一體スキー術と云ふものが易しいのであらうか、又原書に易しいものがある爲であらうか、又嘘でも何でも書易い爲であらうか、スキーの本がシーズンの初めに出版界の注目をひくことは近頃繋くなつた樣に思はれる。

今年だけでもスキーや、冬の山に關する出版物が五、六冊あつたやうである。

笹川氏のスキーイング、平井氏の山岳スキー、鐵道省のスキーとスケート等は天下に廣く宣傳されたものであらう嘗て、該書の評は本誌に載つたことがあるから此處では省く。

稿を閉づるに當つて、長々と牛の垂涎の樣にこのシーズンの過ぎた跡を送りましたが、なか〳〵これで此處まで來て考へて見ますと、未だ〳〵不足な事が數ありますが、到底其枝葉を摘んで居ることが出來ません。何卒此不足な點は篤志の方にお纒めをお願ひ申します。

シーズン外ではありますが、僕達の樂しみを極めさせてくれるスキーや、スキー靴、さては冬の衣服等、雪上に親しみを持つ凡べてのものを可愛勝つて今から手入れを充分にして又來るシーズンを待ちませう。(二五・六・一)

先シーズンの雪

G O K 生

今になつて、先シーズンの事を思ひ返すのは遲いかも知れないが、北海道では先シーズンのスキーは隨分惠まれて居た方であつた。雪の積り始めはそんなに早い事はなかつたが、三月以後の降雪が大部豐富であつた爲に、非常に長いスキーシーズンを樂しむ事が出來た。

札幌では十一月の中旬から滑る事が出來た。未だ雪は大抵濕つて面白くはなかつたが、それでも十一月中に十日間位は相當痛快に滑走する事が出來た。そして夕方になると稍々雪が乾燥して、冬の滑走を思ひ出させるやうな狀態の事も少くなかつた。又山に行けばもつと豐富な雪で滑る事が出來たであらう。

十二月七日からは、札幌も全く雪の世界となつた。中旬頃までは大きなスロープでのスキーは出來なかつたが、それ以前でも雨の降つた事は殆ど無かつたので、何處かで面白く滑る事は困難でなかつた。勿論廿日からは僕等は青山温泉に行つたから、雪は多過ぎて困る位、又不思議に氣温が絶えず低くて、不愉快な思ひをする事は全くなかつた。丁度昨年の十二月はスカンヂナビヤ半島では、隨分シュネーマンゲルがあつて雨が大部降つた爲、折角の競技會其他の計畫がオヂヤンになつたこの事であるが、僕等はそれに比べると滅法運が良かつたわけである。先々シーズンの償ひに充分なる。

一月から三月までは例年の通り、殆ど絶えず粉雪、若し濕つて居た時には午後三時過まで我慢すれば必ず愉快に滑れた。唯二月の末にクルステのひどいのに遭つて、折惡しく來札中の中山再次郎氏に隨分惡口を云はれた事があつた所が又その時札幌には殆ど一片の雪も降らなかつたのに、十里離れた岩見澤方面には目茶苦茶に好い乾粉雪が澤山降つて、可成天道樣をうらんだ事があつた。

三月末からはそろ〳〵ザラメが多くなる。青山温泉合宿

期から一段と雪の變化が著しい。然し夕方の粒狀雪の滑走も仲々痛快なものである。時に手稻の雁皮平に行つて、夕方の雪の乾き凍るを待つては滑つて來たが、氷に近いやうなザラメ雪の上ではほんとに火の出るやうな直滑降が行はれた。又少し吹雪いた日には、夕方は全く冬と變りのない粉雪に遭つて、思はず狂喜した時の氣分は忘れられない。

こうして四月中旬に近づくにつれて、雲の範圍も次第に狹ばめられて行つた。山の上からの一氣の滑降等もむづかしくなつて來た。それでも札幌近郊の圓山公園附近でも、北側の斜面の夕方五時頃からの滑走はまた捨てられぬ面白味があつた。又雪が餘り硬過ぎても、內地の事を思へばと云はれると、そんな事に贅澤云ふべきでない。まだ〳〵いくらも滑れる餘地のある事に氣が付く。

そして遂に五月になると、山小屋にでも立籠らねば、スキーは出來なくなる。之に反して夏スキーの活動が著しくなつて來るわけである。私は學校などの關係でスキーは四月廿日で先シーズンはふつつり思ひ切つたが、それでも昨年十一月から四月までの六ヶ月間で、面白く滑つたと思つた日が約百三十日位になる。北海道で滑つた者としては、隨分滑り拔いた方だと信じて居る。之は今年が一般に氣溫が低かつた爲で、四月の中頃まで殆ど降雨が無かつた事に依つても明かであるが、兎に角スキーを長く樂しんだと云ふ事には隨分惠まれて居たと思ふ。每日の氣溫でも取つておいて平年と比較したら、可成面白いカーヴを見られた事であらう。

そして更に來るべき五ヶ月後のシーズンが待ち遠しい。

（終）

H.U.S.V 近着圖書

Alpine Journal.

山岳　第十九年第一號（尾瀨號）

Mountain Adventure at home and abroad

G. D. Abraham

大正十四年度各學校山岳部夏期計畫

□第八高等學校山岳部

第一班　鳥帽子ヨリ槍ヘノ縱走
第二班　笠ケ岳、穗高岳縱走
第三班　裏立山山脈縱走
第四班　穗高岳、赤岳、硫黃岳、黑部川、立山縱走
第五班　立山、劔岳、針ノ木越
第六班　立山ヨリ槍ヘノ縱走
第七班　劔岳生活
第八班　燕ヨリ槍ヘノ縱走
第九班　白馬岳方面
第十班　木曾駒山脈縱走
第十一班　赤石岳方面
第十二班　白根三山縱走
第十三班　日光ヨリ尾瀨ヘ
第十四班　上高地天幕生活

□松本高等學校山岳部

第一班　燕岳、槍ケ岳、乘鞍岳
第二班　針ノ木、鳥帽子、槍、穗高縱走
第三班　針ノ木越ヘ、立山、劍、白馬
第四班　針ノ木越ヘ立山
第五班　白馬岳
第六班　後立山山脈
第七班　針ノ木、藥師、槍穗高縱走
第八班　木曾山脈縱走
第九班　仙丈岳、東駒ケ岳山脈縱走
第十班　白根三山縱走
第十一班　大澤岳、赤石岳、東岳縱走
第十二班　金峰山、甲武信嶽

其の他八月中

第一班　劔岳尾根縱走
第二班　鋸岳縱走
第三班　鹿嶋鎗本谷

□第四高等學校北辰會旅行部

第一班　立山三山、針ノ木越
第二班　黑部ヨリ白馬ヘ
第三班　鳥帽子ヨリ槍ヘ
第四班　內藏ノ助平
第五班　立山ヨリ笠ヘ
第六班　藥師ヨリ鳥帽子ヘ
第七班　立山劍縱走
第八班　北鎌尾根、槍穗高縱走
第九班　大窓、小窓、三ノ窓、劔、立山縱走
第十班　白山、白川郷
第十一班　常念山脈、槍穗高縱走
第十二班　赤石山脈縱走
第十三班　後立山山脈縱走
第十四班　上高地キャンピング

□第二高等學校山岳部

第一班　朝日連峰縱走
第二班　飯豐山、大日岳
第三班　鳥海山、月山方面
第四班　栗駒、田澤湖、岩手山
第五班　北山當抱
第六班　會津駒、燧、尾瀨、赤城山
第七班　北海道西部方面
第八班　北海道中央高地
第九班　北海道東部地方
第十班　白馬連峯縱走
第十一班　常念山脈、槍、穗高岳
第十二班　鳥帽子、槍ケ岳縱走
第十三班　針ノ木越、立山、劔岳
第十四班　遠見、惡澤、赤石岳
第十五班　甲斐駒、仙丈、白峯縱走

「山とスキーの會」會則

一、山とスキーの會はスキー及び山岳に關する月刊雜誌山とスキーを發行する爲に北海道帝國大學文武會スキー部關係者の組織する會である。

二、必要に應じ雜誌の發行以外にスキー及び山岳に關する各種の事業を行ふことあり。

三、會員は幹事會の推薦により會則を承認し出資金一口以上を引受けたるものに限る。

四、出資金額は一口金貳拾圓とする。會員は此範圍内に於ては常任幹事の指定により何時にても拂込をなすべきものである。

五、會員退會するときは常任幹事に通告しなければならぬしかし既に拂込みし出資金は返還しない。會のため不都合あるときは幹事會の決議により除名することがある。除名の際は拂込出資金を返還するも在會中要した各種の費用を精算する。

六、會員中會務にたずさはるものを幹事とする。

七、幹事の互選により三名の常住幹事を定め常に會務に當ることゝす。

八、必要に應じ特定の事項に就て委員を置く。

九、毎月第二水曜日研究會を開く、常任幹事の必要と認めたるときは臨時之を開くことあり。

一〇、協議事項の決定は出席幹事一致の意見による。但し幹事會は幹事總數二分の一以上でなければ成立しない

一一、凡て役員は幹事會に於て定める。

一二、毎年一回五月會員の總會を開き、會務の報告をする幹事會に於て必要と認めたる時は臨時之を開く。

一三、會員は會務につき幹事は質疑し又は提案する事が出來る。

一四、會則の變更、その他重要なる事項は總會に於ても當會員三分の二以上の賛否によりて決定する。

山とスキーの會現在會員

相川正義　阿部謹吾
赤松勳　青木三郎
青山馨　伴素彦
長谷川敦　平井左門
平塚直秀　廣田戸七郎
本田治吉　稲積猶
伊藤秀五郎　岩森秀夫
伊藤健夫　加納一郎
小林一勝　小森五作
桑森一郎　松川五郎
三田村健太郎　宮城孝治
村本金彌　宮澤精
三戸勳　並河功
内藤克三　中野誠一
南波初太郎　岡見清二
緒方直光　岡本三男
岡村源太郎　大久保鐵二
大島幸吉　小川玄一
緒方溫光　佐々木政吉
須藤英雄　須藤宣之助
田口鎭雄　瀧田次郎
高杉正樹　德永熊雄
龍田不二雄　田中二郎
内海榮郎　和辻廣樹
山極三郎　山口健兒
北大スキー部　小野修

告

◇　從來各地に「山とスキー」通信員として適當な人をお願ひし山岳及びスキーに關し隨時通信をお願ひして居りましたが、今般會の都合で止す事となりました。通信員諸氏の今まで、この會に與へて下さつた好意を便宜を深く謝する次第であります。

◇　「山とスキー」第五週を迎ふるにあたり、第一號からの購讀者諸氏に些か乍ら記念品を贈呈致す事になりました。追つてお送り致します。

◇　本號は既記の如く、六、七月合併記念倍大號と致し、臨時定價は六拾錢です。豫約購讀の方、この旨御承知おき下さい。

野幌林間夏期大學

石狩平原の中央に殘された有名な野幌の原生林、此は今一部天然紀念物に指定せられてゐるが、そこの森の中で、八月四日から十日まで一週間、天幕生活の下に夏期大學が催される。ハウス型の天幕が數十も張られて、美しい林間の歩道が連絡せられてゐる中に、朝まだきから鳥の啼いて目をさまされる。さわやかな一週間のキャムピングはその位置、その設備に於て他に追從を許さぬものがある。詳細は北海道廳内北海道點業會へ照會すればよい。（かの生）

新刊評

「山岳」第十九年一號、五月二十三日に「尾瀬」と題して出された。武田博士、館脇君外に二氏の尾瀬の記事と、武田博士の同地方の植物景觀の銅版數十とが收められてある「尾瀬をめぐりて」館脇君の文は植物の生態に、君の自然に對するなごやかな心を織り込んで綴られた優れたものである。寫眞もまたそこの自然を表して餘蘊がない。

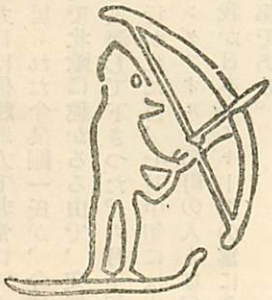
Der grosse Sprung und andere Spruenge — von Carl J. Luther. München 1925.

Der Skikurs — von Carl J. Luther. München 1925.

カール・ルーテル氏の近作二著、前者はスキーや山の旅に就ての隨筆、後者は詩と繪とで一週間のスキー練習を記したもの、氏の達文に加ふるにシェーネツケル氏等の彩筆が見事である。

大雪山彙森林帶の生態學的研究　原田泰著

北海道中央高地連山に關する植物分布に就て記されたもの、著者が數回にわたる實査と、確實な檢索との成果である。同方面へ遊ぶ人には好個の參考資料である。（北海道廳内北海道林業會發行、價五〇錢）（以上かの生）



會務片々

○ 仕事を引繼いでからの會務を簡單に記錄にまで殘して置きたいと思ふ。リンコルンの言葉であつたか「何事にもまれ七年保存せばその必要を感ずることあるべし」と言ふ句が懷ひ出される。

○ 横濱郵便局の消印で四月廿七日にそれこそ板さんの仲よしの松方三郎さんから長い手紙と、原稿が送られて來た。それはスウイスのジュネイヴからの便りであつた。毎日滑つては山を見て暮して居らるるプリンスオブインディア（あちらで松方君が貴はれた尊稱）さん、それこそ山とそしてスキーのことを心ゆくばかり研究して居られるらしい恐らくこの世界中での一人の最大幸福者であらう。

○ 私達の會に密接な關係のあつた京大理學部に籍を置かるる木原均先生は學術研究の爲文部省の在外研究員として派遣せらるることになり三月十五日に神戸から遙々あちらに旅立たれた。主義は出來るだけ多く見て多く聞いてお歸へりになる考へとやらで、特にスウエデン、ノールウエーに永らく滯在の由。羨む人も日本中には少くないだらう

○ 五月の始めに六五徒步會から第三九號會報の寄贈があつた。

○ 四月廿九日に信越地方で非常にスキー術について熱心に研究して居られた今泉剛一氏が、今度特にスキー製作の研究の目的で北歐に趣かるる由で、突然本會を訪れられてその抱負を披瀝して下さつた。六月下旬日本を立つてシベリヤ經由で行かれた筈、七月中旬にはもうフインランドの首府ヘルシングフォルスの町の人となつて居らるる筈である。幸ひに我が日本のスキー界の爲に多大の貢献あらんことを望む次第である。

○ 五月廿二日　第一回會員會合、出席者二〇名、會務報告、第五十號（七月一日發行）記念號の相談。

○ 五月廿四日吾等の宮樣の御鹿島立の日、山とスキーに關係ある皆樣と共に宮樣の一路御平安を祈り度いと思ひます。終りに一言します。宮樣は凡べての運動の内でスキーの直滑降が一番御得意であらせられる由。

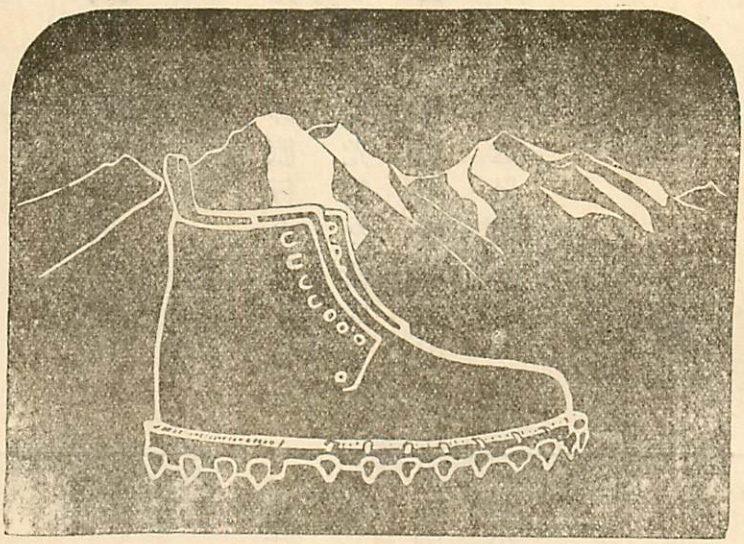
○ 五月廿六日「春雨煙るベルンの町の風景はまた格別です」と云ふ樣な意味の葉書を、木原さんから頂きました葉書にはベルンの町の向ふに聳え立つアルプスの連山が數々肩を並べて居る大へん美しいものでありました。

○ 六月一日午前一時半過ぎ本會事務所のすぐ近くにて火災がありましたが。本會は何等の損失も受けずに濟みました。新聞紙上の火災の報告によつて早速見舞を下さつた方々に感謝致します。

○ 六月十日　本年度第一回研究會開催。

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

山岳紀行文

讀者諸兄今夏御旅行の收穫を以て誌面を飾るの光榮を給はらんことを乞ふ。原稿用紙御入用の向はお申越次第送呈致します。

編輯

本誌殘本希望の方へ

本誌第十九號より四十九號まで（但シ第一號より第十八號迄及び三三號、三四號絶版）殘本保存してあります。希望の方へよろこんで御讓り致します。

山とスキーの會

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定價

金參拾錢（本號ニ限リ六拾錢）

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十四年六月三十日印刷
大正十四年七月一日發行
（毎月一回一日發行）

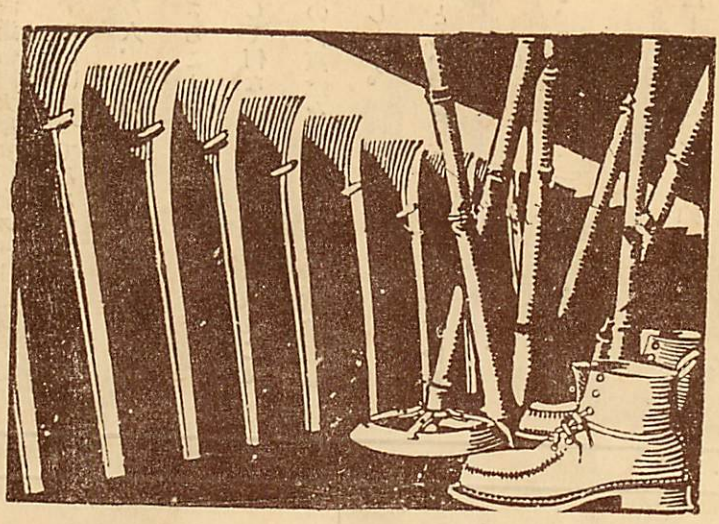
編輯者　相川正義
印刷兼發行者　廣田戸七郎
札幌市北一條西二丁目
印刷所　札幌印刷株式會社
札幌市北六條西六丁目
發行所　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No 50. Julio. 1925. Sapporo. Japanujo.

大正十三年七月三十日第三種郵便物認可
大正十四年六月三十日印刷納本
大正十四年七月一日發行

山とスキー 第五十號
本號に限り 定價六拾錢

MIMATSU
SKIING, MOUTAINEERING
AND
GAMPING OUTFIT



美滿津特製
スキー・山ノ道具・及ビ
キヤンピング・アウトフヰツト

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前